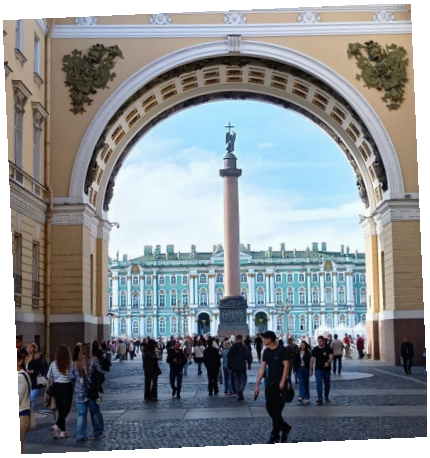
JIC インフォメーション

第 236 号　2025 年 10 月 10 日
年 4 回 1･4･7･10 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所:JIC国際親善交流センター　発行責任者:伏田昌義　https://www.jic-web.co.jp

東京オフィス:〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-10-5 岡田ビル 6 階　TEL:03-3355-7294　jictokyo@jic-web.co.jp
大阪・ロシア留学デスク:〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-2-22 NS ビル 5 階 TEL:06-6944-2341

ロシア・旧ソ連 国際交流誌



写真は、本紙記事より抜粋

外務省がロシア危険情報の一部を改訂・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2 P
ロシア語短期研修ツアー・参加者からの感想・・・・・・・・・・・・・・3 P
外国人がロシア国内携帯電話を使えるようにする方法
ロシア長期滞在に必須の手続き・・・・・・・・・・・小原 浩子・・・・・7 P
≪投稿≫ 旅行記
ロシア視点で見たハルビン・長春の旅・・・・・菅原 信夫・・・・・9 P
≪寄稿≫ 第 2 回国際会議（ペテルブルグ）へ参加して
「日ロ；持続可能な発展への道」・・・・・・・・五十嵐 徳子・・・・11 P
≪連載≫ 徳山あすかのロシア生活
伝統文化を現代風に楽しむ旅～カルムイク共和国・・・・・・・12 P
「関係を繋ぎ留める努力、今こそ必要」
日本センターの閉鎖について・・・・・・・・・・・朝妻 幸雄・・・・・15 P
≪連載≫ こんな時代にロシア語のすすめ
「電話が嫌い、電話が怖い」・・・・・・・・・・・・・黒田 龍之助・・・・・19 P
≪日ロ交流情報≫ ロシア音楽の夕べ、ほか・・・・・・・・・・・・・・・20 P
≪インタビュー≫ 多久田さやかさん
14 歳でバレエ留学、18 年間ロシアで活躍・・・・・・・・・・・・・22 P
あいちロシア協会の講演会
「ロシア民謡はなぜ日本人の心に響く」・・・安原 雅之・・・・25 P
「へだたれば、つなぐ」（中編）・・・・・・・・・・・岡本 健裕・・・・28 P

外務省がロシアに対する危険情報を一部改訂

やむを得ない事情での渡航は妨げない！

日本外務省は、9 月 12 日付けで、ロシアに対する海外危険情報の内容を一部改訂しました。今回の改定では、ウクライナとの国境周辺地域を除く地域（モスクワ市を含む）について、レベル３（渡航中止勧告）は維持するものの、「ただし書き」の内容を変更しました。

事情があればロシア渡航・滞在を妨げない

改定後の危険情報では、「ただし、真にやむを得ない事情がある場合には、以下※を除く地域（モスクワ市を含む）に渡航・滞在することを妨げませんが、その場合には、特別な注意を払うとともに、現地の日本大使館または日本総領事館と密接に連絡を取り、十分な安全対策を講じてください。」となっています。

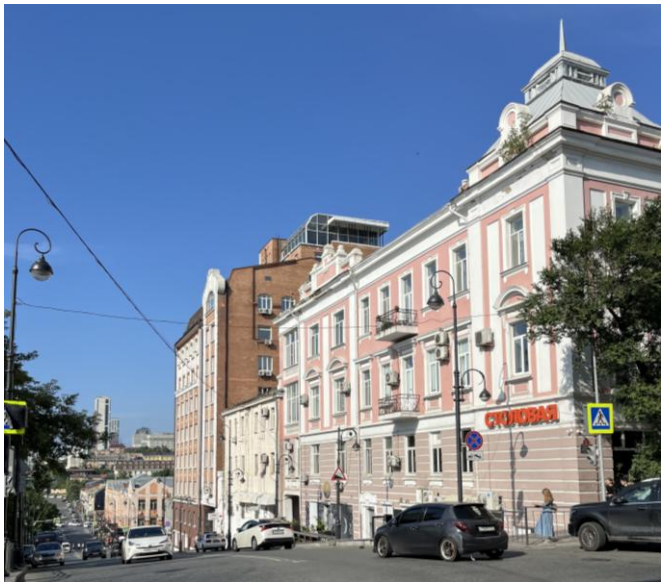
注※で示されている地域＝ウクライナに隣接するブリャンスク、クルスクなど５州および北カフカスの各共和国（チェチェン、北オセチアなど）への渡航中止勧告および退避勧告は維持されたままです。

外務省の説明によると、「ウクライナとの国境周辺地域を除く地域の危険レベル３は維持するものの、これらの地域においては、戦争開始当初に懸念された不確実な状況とは異なり、現在、当地の情勢は全体として安定的に推移しています。そのためただし書きを変更し、真にやむを得ない事情がある場合には渡航・滞在することは妨げないこととしました。その場合には、特別な注意を払うとともに、現地の日本大使館または日本総領事館と密接に連絡を取り、十分な安全対策を講じてください。」としています。

遺骨収集、ビジネス、留学、研究調査などが可能に

ここで問題になるのは、「真にやむを得ない事情がある場合」の内容です。どのような場合が含まれるのか。一般的には、慰霊や遺骨収集といった人道目的での渡航、ビジネス、留学、研究調査、教育活動などを目的とした渡航と言われており、すでに日本企業の現地駐在員の家族で渡航を控えていた人がモスクワを訪れたり、現地日本人学校へ新任の教師が着任したりといった事例が聞かれます。

これまで日本の一部の国公立大学は、学生のロシア留学や教員の調査研究を目的とするロシア渡航を「レベル３」を理由に停止してきました。「知の探究」を目的とする教育研究機関としては本来考えられない不自由な対応が続いてきたわけですが、今回の危険情報見直しで、少なくとも教員の調査研究活動や学生のロシア留学は、安全対策に十分気を配るという前提で、解禁されるものと期待されます。



ロシア・ウラジオストクの街並み

中国経由便でロシア渡航がかなり容易になったのも追い風

もともと「レベル３」の主要な理由は、「各国による制裁やロシアの対抗措置が続いていることにより、ロシアから日本や西欧への直行便がなく、国際送金についても様々な制限があり、国際クレジットカードが利用できない状況」で、ロシア渡航に困難や不安が伴うということでした。昨年来、日本からロシアへ比較的短時間で行くことができる中国経由の航空便がいくつか飛ぶようになり、ロシアへの送金も工夫すればある程度可能になってきた状況を踏まえ、JIC では安全確保に十分気を配りながら、昨年夏にウラジオストクへのロシア語短期研修、今夏サンクトペテルブルグでのロシア語研修などを実施してきました。

今回の危険情報一部改訂を受けて、JIC ではとくにロシア語留学、ビジネスや調査研究での渡航をサポートするため、万全の体制を整えることにしています。

JIC では今夏「サンクトペテルブルグで学ぶ、短期ロシア語研修」(8 月 31 日～9 月 15 日) を 8 名の参加で実施しました。以下、参加者の皆さんからいただいた感想です。
文化都市サンクトペテルブルグでホームステイしながらのロシア語研修は、それぞれに得がたい体験となったようで、皆さんから、素敵なコメントをたくさんいただきました。(編集部)

ペテルブルグ・ロシア語研修ツアー

各参加者からの感想

それぞれに得がたい体験

初めてのロシア！ペテルブルグを探検

Atelier Tenko（テンコ）さん〔社会人〕

初めてのロシア、初めてのロシア語、初めてのホームステイで、最初は色々不安でしたが、このツアーに参加して本当に良かった！Vlogger なので動画を撮って、見たこと、やったこと、食べた物、面白かったことを全部名前付きで記録しました。見たい方は以下の URL へ↓↓
https://atelier-tenko.com/15-days-in-saint-petersburg-russia/

★留学のきっかけ

元々ロシアに興味があって行きたかったが、行き方が分からない、ロシア語も文字が読める程度で、ほぼできなかった。そこでたまたま JIC さんのセミナーに参加し、本研修の話を聞きました。チャンスは二度と来ないかもしれませんので、全ての不安を無視して飛び込みで参加させていただきました。ロシアでの滞在をより楽しめるように、行く前に自分でロシア語を A2 レベルぐらいまで上げておきました。ビザやスケジュールなどは JIC さんがしっかり見てくれましたので、終始スムーズな留学でした。向こうでは優しいホストファミリーがたくさんお話をしてくれて、学校の授業も分かりやすく、ロシア語がすごく上達しました！

★サンクトペテルブルクの街探険

学校は一日 3 時間なので、街をたっぷり自由探険できます。作品を作る人間として、ロシアの豊かな童話や民芸と歴史に特に惹かれました。現地でのアイデア探しが目的なので、自分は有名な観光地、ロシア料理店、本屋さんをメインに探険しました（見たい方は冒頭の URL で！）。探険結果、サンクトペテルブルクが想像以上に面白くて楽しかった！
サンクトペテルブルグは大きな街で観光地や博物館、お店が多い。ロシア料理も美味しかった。私の場合、一番好きなレストランはネフスキー大通りの Katyusha。一番面白いと思った場所は同じネフスキー大通りの Avrora 映画館です！

Tenko さん作・短期ロシア語研修のイラスト

★ 最後に

6 年前好奇心で適当にロシアについて調べはじめたら、調べれば調べるほど好きになって、今回やっと行けて、一つの夢が叶いました。ウクライナもロシアも素敵な所がたくさんありますので、戦争が一日も早く終わるよう祈ります。

挑戦することが若返りの秘訣

K.N さん〔６０代／社会人〕

私は現在 68 歳のシニアなので、この研修プログラムへの参加は大丈夫なのか不安はありましたが、今回 20 代の学生、30 代の社会人に交じって、共に学生気分で勉強させていただきました。言語に関しては若い方々の足を引っ張ってしまったかもしれませんが、彼らとの交流は、大変楽しく、若返り

になりました。思い切って参加して本当に良かったです。

また、ピョートル大帝夏の宮殿観光や、日本語を学ぶ学生との交流、ロシア伝統柄のまな板の絵付け、ブリヌイ（ロシア風クレープ）クッキング等の行事も楽しく参加させていただきました。

ホームステイ体験もなかなかできないことです。ホストマザーは私と同じ年齢の方でした。日本に帰ってきてからも whatsapp で時々やりとりしています。ロシア語の勉強になります。

若い方々との行動に体力的についていけるか心配でしたので、疲れ防止にビタミン剤を持っていきました。また、梅干し、即席味噌汁も持って行きましたが助けられました。

今回この研修に参加して、やってみたいことには何でも年齢関係なく挑戦することが大事だと思いました。

みんなでブリヌイのクッキング

ウラジオとペテルブルグ、それぞれの研修に参加

I.M さん〔20 代／学生〕

2024 年にウラジオストク、2025 年にサンクトペテルブルクで、計２回のロシア語研修に参加しました。どちらも約 2 週間の滞在でしたが、それぞれの街で異なる体験をし、ロシアという国の多様性を肌で感じることができました。

24 年に行ったウラジオストクでの第一印象は、「日本から一番近いヨーロッパ」でした。建物の作りや道幅の広さはロシアらしくスケールが大きく、中心部の街並みにはヨーロッパのような雰囲気を感じる。そんな景色の中で、日本車が驚くほど多く走っていることが印象的でした。トヨタ、ホンダ、日産……見渡すと、視界に入る車の７～８割が日本車ではないかと思うほどで、ふいに「近さ」を実感させられた瞬間でした。

今年参加したペテルブルクの第一印象は、「ロシアの京都」でした。帝政ロシア時代の首都として栄えたこの街には、至る所に歴史的な建築物や像が残されており、歩いているだけで過去の出来事に触れているような気持ちになります。

また、私たちが滞在していた時期はちょうど新学期の始まりと重なっていました。9 月 1 日は「知識の日」と呼ばれ、ロシアで大切にされている祭日の一つ。生徒から先生へ花を送る習慣があり、花束を抱えて街を行き交う子ども達が印象に残っています。多くの大学や教育機関が集まるこの街は、まさに歴史と学びが共存する”学生の都”だと感じました。

滞在スタイルの違いからも、それぞれ異なる学びがありました。

ウラジオストクでは大学内にある 2 人部屋の寮で過ごし、食堂での食事や、空き時間に広いキャンパスを散策する時間など、大学の中で過ごす日々を満喫できました。現地の学生や同年代の大学職員から聞くロシアの学生生活や日常生活の話は、日本とは異なるものが多く、どれも非常に興味深いものでした。

ペテルブルクでは、65 歳のホストファザーのもとで 2 週間のホームステイを体験しました。ペテルブルクの歴史やソ連時代の生活について、地元の人の視点で語られる話は、非常にリアルでした。また、私が使っていたのはかつての子ども部屋で、壁には子ども達の学校の賞状や写真がそのまま残されていて、それがウラジオストクで学生達から聞いた話と繋がり、なんだか嬉しくなりました。

街の規模や雰囲気も異なる２都市ですが、動物と人との距離感には共通したものがあると感じました。ウラジオストクの大学構内には野良犬がいて、散歩やピクニックをした際に寄ってきていました。聞くと学生達が自然に餌をあげており、「みんなの犬なんだよ」と話してくれました。

ペトロパブロフスク要塞の猫とウラジオストクの犬

ペテルブルクでは、滞在していたアパートの敷地内に猫が何匹もおり、よく車の上で休んでいました。ホストファザーに尋ねると、「誰が飼っているかわからないが、みんなで世話をしてる」と笑って答えてくれました。また、ペトロパヴロフスク要塞に行った時にも猫がいて、その話もすると、「みんなに可愛がられているが、あの子は働いている。ネズミを捕

っているんだ」と教えてくれました。ロシアの人々と動物の自然な距離感に、心が温かくなりました。

こうして人々の暮らしや温かさに触れられたことは、現地で学ぶ語学研修ならではの経験であったと感じています。

２都市での語学研修を終えて、それぞれで異なる刺激や発見、人との出会いがあり、どちらの街も私にとって大切な思い出の場所となりました。今後もさまざまなロシアの街や人々と出会い、まだ見ぬロシアの一面に触れていきたいです。

「やっぱり夏が好き！」

M.E さん〔30 代／社会人〕

私はデルジャーヴィンのロシア語研修には３度目の参加でした。

1 度目は大学生の時に今回と同じく夏の短期研修プログラムに、2 度目は昨春の短期研修プログラムに参加させて頂きました。結論から申しますと、今回のプログラムが今までで 1 番素晴らしかったです。

まずは天候です。学生時代に参加した際は、雨が多くとにかく寒くて到着早々に風邪を引いてしまいました。それに比べて今回は、比較出来ない程に天候に恵まれ、素敵な観光を沢山することができました。また、昨年の春に参加した際は、まだ雪も残っている時期で吹雪に遭うこともあり思うように観光ができなかったのですが、今回はその分まで楽しむ事ができました。

加えて、一緒に参加した皆様が本当に優しくて温かかった事がとても大きかったです。私と同じく社会人の方もいらっしゃいましたが、やはり大学生の方が多く、最初はどの様に接したら良いのか分からなかったのですが、皆さん分け隔てなく接して下さり、本当に有り難かったです。

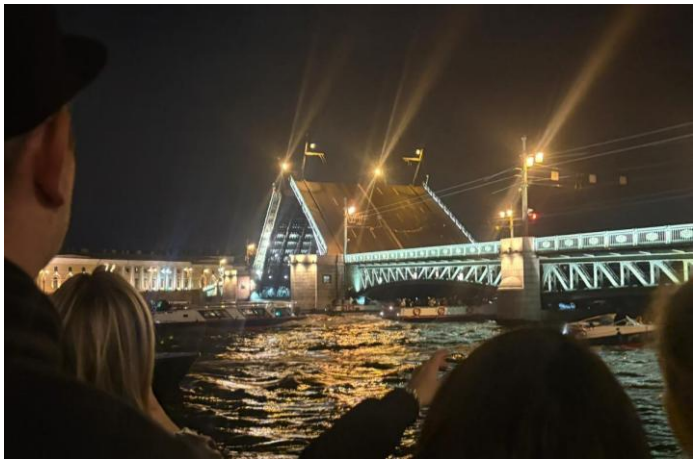
そして何より今回の旅を素晴らしいものにしてくれたのは、大好きなホストマザーの存在です。言葉には出来ない程に、優しくて素敵な方でした。毎回食事を一緒にとって下さり、沢山会話をする事ができました。生活する上での細かい面も色々と気を遣って下さり、優しさが身に染みました。あまりにも居心地が良く、日本に帰国するのが寂しくて、後ろ髪を引かれる思いでした。

サンクトペテルブルクは大好きな街で、私にとって第２の故郷だと思っています。また必ず訪れます。

温かく迎えられたペテルブルグで

K.Y.さん〔２０代／学生〕

冷酷な人々や暗い街の雰囲気といったイメージが、私のロシアに対する勝手なバイアスでした。しかし実際にその地に降り立つと、別れ際に抱き合う少女たちや談笑する学生たちの笑顔を目にし、そのイメージは誤りだったとすぐに気づきました。16 日間のサンクトペテルブルクでの研修。到着前の不安に反して、残暑の心地よい天気に恵まれ、かけがえのない時間を過ごすことができました。



ホストブラザーと観に行った дворцовый мост

最も感謝したいのは、現地の友人たちです。私は大学でロシア語を専攻しており、日本で交流を通じて知り合ったロシア人学生の友人がいました。今回の研修に参加することが決まった際彼らに連絡すると、再会を喜び多くの面で助けてくれました。特に、制裁の影響で国際クレジットカードが使えない中、自分の MNP（ミール）カードを快く差し出してくれたり、劇場や観覧船のチケットを代わりに購入してくれたりと、現地生活を大きく支えてくれました。また多忙の中でも私との観光に時間を割いてくれました。彼らと眺めた観覧船からのネヴァ川の絶景や、夜のエルミタージュの月明かりは忘れられない思い出です。

研修プログラム内の交流会で出会ったサンクトペテルブルク国立大学の学生たちにも感謝です。彼らは日本語で一生懸命話しかけてくれ、学習教材などを見せてくれた子もいました。彼らの努力の跡を目にし、同じ語学学習者として強い刺激を受けました。特に仲良くなった学生とは後日食事や散歩を共にし、大学卒業後の将来への希望や不安についても語り合いました。

なにより、この２週間の研修において最もお世話になったのは間違いなくホストブラザーでした。彼は大学を卒業したばかりのエンジニアで、日本語を学んでいます。ホームステイの手続きや生活のサポートを一手に担い、私が行きたいと

ペテルブルグ大学で日本語を学ぶ学生たちとの交流会

いった場所には、夜中であっても連れて行ってくれました。帰宅時には毎日玄関で迎えてくれ、日本語とロシア語を交えてその日の出来事や互いの国の関心事について話し、沢山笑い合いました。

街ゆく人たちの温かさにも触れることができました。駅で定期券のチャージ方法が分からず戸惑っていたとき、英語で話しかけて助けてくれる人がいたことも一度ではなく。アジア系の人々が少ない中でアウェイな気分を覚える場面もありましたが、ロシアで暮らしている様子のアジア系の女の子と目が合い、遠くからこっそり微笑みかけてくれたこともよい思い出です。そうしたささやかな出来事が温かい記憶として残っています。

私たちが日本に帰ってから、サンクトペテルブルクはとても寒くなったそうです。サンクトペテルブルグ全体からあたたかく迎えられたかのような研修だったと思います。

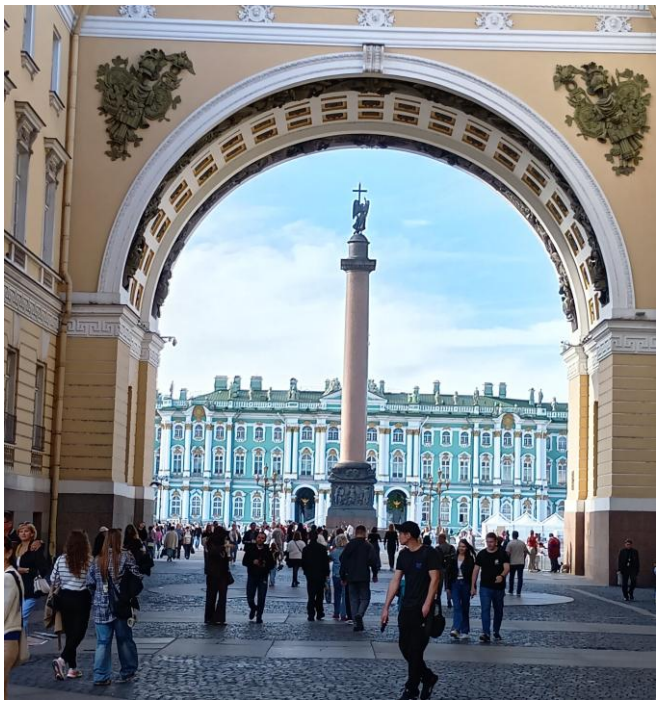
「物語と現実が交錯する街」

Y.Z さん〔 20 代／学生〕

自分はロシアには何回か行ったことはあったのですが、10 年近く行けていなかったので、今回久しぶりに行ってみようと応募しました。サンクトペテルブルグの街並みは建物や道路、人々、車、標識すべてが映画のセットのようで、それは整然としていながらも同時に非日常的で、まるで物語の中に自分が紛れ込んでしまったような感覚を覚えました。徒歩 10 分でも歩くのが億劫であった自分が、徒歩 20 分の授業への通学路さえもがあっという間の短い時間に感じられました。それは、通りごとに建物の色や雰囲気が変わり、街自体が歴史や物語を語りかけてくるようで、ただ歩くだけでも新しい発見があったからだと思います。

授業の方も n+1（自分の限界の僅かに上のレベル）を引き出してくれるような刺激的なもので、かといって長すぎるでも短すぎるでもなく、大変有意義な授業でした！ホストファミリーも自分を我が子のように可愛がってくれ、もうひとつの家ができたように感じました。

サンクトペテルブルグはドストエフスキー作『罪と罰』の舞台でもあるように文学の街です。自分自身、この作品を読んでから訪れたことで、街の印象はより深いものになりました。例えば、ラスコーリニコフが葛藤を抱えながら歩いたであろう路地や橋に足を運ぶと、彼の重苦しい心情が街の空気に染み込んでいるように感じられました。その一方で、川沿いの光や壮大な通りの広がりに触れると、彼が最後に見出した救済や再生の希望をも同時に感じ取ることができました。つまり、文学を通して歩くこの街は、ただの観光地ではなく、自分にとって「物語と現実が交錯する場所」として強く記憶に残りました。



サンクトペテルブルグ、宮廷広場

2025 年夏のロシア語研修／日程

8 月 31 日	羽田／関空発 → 上海 → ペテルブルグ着
9 月 1 日 ｜ 9 月 5 日	(午前)ロシア語研修 (午後)市内散策、クッキングレッスン、 フリータイムなど
9 月 6 日	観光～ピョートル夏の宮殿
9 月 7 日	ペテルブルグ大学学生との交流会
9 月8日 ｜ 9 月 12 日	(午前)ロシア語研修 (午後)市内散策、ロシア伝統工芸レッスン、 フリータイムなど
9 月 13 日	自由時間
9 月 14 日 9 月 15 日	ペテルブルグ発 上海着／発 → 関空／羽田着

《ロシア長期滞在に必須》銀行口座開設と国内携帯電話

外国人がロシア国内携帯電話を使えるようにする方法

小原 浩子（JIC 大阪）

2025 年 1 月から外国人がロシアの携帯電話番号を簡単に入手することができなくなってから 8 か月。今年も JIC では 9 月の新学期にモスクワやサンクトペテルブルグへ長期留学生を送り出しました。

短期間のロシア滞在であれば、ポケット Wi-Fi やローミング、E-SIM を利用したデータ通信ができれば、ロシアの国内携帯電話がなくても特に不自由はありません。しかし、長期間ロシアに滞在し生活をする場合には、かなり大きな不都合が出てきます。

一番大きな問題は、ロシアの携帯番号がなければ、ロシアで銀行口座を開設することができないことです。2025 年 7 月からロシアの法律が変わり、銀行口座を作るためには国内携帯番号の紐づけが必要となっています(一部の例外を除く)。ロシア（特にモスクワやサンクトペテルブルグなど都市部）では、今やロシア人は生活のすべての面で携帯のアプリカードまたはクレジットカードなどキャッシュレスで支払いを済ませ、現金をほとんど持ち歩きません。お店では現金の支払いも可能なのですが、お釣りを探すのに時間がかかったり、「お釣りがない」と断られたりする場合があります。そもそもオンライン決済でデビッドカードかクレジットカードでしか購入できないサービスもたくさんあるため、ロシアで銀行口座を開きキャッシュレス決済に対応しなければ日々の生活がとても不便です。

したがって、ロシアの国内携帯電話を取得し、銀行口座を開設することは、留学やビジネスで現地に一定期間以上滞在する人にとって、必須の手続きになりつつあります。

以下、この 9 月にモスクワで実際に経験した国内携帯電話を使えるようにするまでの手続きの流れを紹介します。

＜準備＞

１）パスポートの公証訳を取得

公証訳は、日本ではロシア大使館で取得できますが、料金が高く受付日も限られているため、ロシア到着後に民間の公証訳事務所に依頼するほうが便利です。通常 3～4 日で取得可能です。

２）滞在先から регистрация（滞在登録書）を取得

通常、滞在登録ができるホテルや宿泊施設では 2～3 日で出してもらえます。大学寮に入寮する場合は、1 週間程度かかることもあります。

３）事前に SIM カードを購入

SIM カードはアクティベート（有効化）されておらずそのままでは使えませんが、SIM 購入でまず携帯番号はわかります。後述する Госуслуги（公共ポータルサービス）の手続きの際に、あらかじめ携帯番号を入力しておくと、手続き後すぐに SMS で Госуслуги へのログインパスワードが届くので便利です。

＜手続き開始＞

以上の準備できたら、書類とパスポートを持って手続きを開始します

① СНИЛС（Страховой номер индивидуального лицевого счёта／個人保険番号）の取得

取得手続は МФЦ（Многофункциональный центр／多機能センター）で行います。モスクワには 130 以上の МФЦ がありますが、外国人向けサービスを提供しているのは 9 ヵ所で、それらは中心部から外れた場所にあります。

取得に必要な書類は、4 点です。(1) 所定の申請書、(2) パスポート、(3) その公証訳、(4) ロシアでの滞在登録書。申請手続きそのものは通常 10～15 分で完了するのですが、СНИЛС を取得する外国人が多いため、窓口が混みあって長時間かかることがあります。システム・トラブルで申請受付が停止され、その日のうちに СНИЛС の証明書を受取ることができなかった事例もありました。

日本人が СНИЛС を取得する場合、一つ問題があります。日本のパスポートには「出生地」の記載がなく、「本籍」のみが記載されています。СНИЛС の取得には出生地の記載が必要なため、МФЦ では СНИЛС 取得ができないと言われ、結局 СФР（Социальный фонд России／ロシア年金・社会基金)に直接行って手続きをすることになりました。しかし、他の例では本籍を出生地と読み替えて手続きができた МФЦ

もあり、事務所によって対応が違っているようです。

② Госуслуги（公共サービスポータル）のアカウント登録

Госуслуги は政府のポータルサイトです。ロシアでは、医師の診察予約、罰金の確認と支払い、給付金の申請など多くの政府サービスをオンラインで受け取ることができます。そのために Госуслуги にアカウントを持つ必要があります。

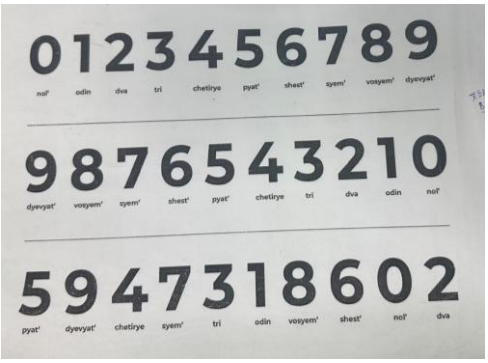
手続は、СНИЛС 取得と同様に、外国人向けサービスを提供している МФЦ で行います。Госуслуги の登録申請書に記入して、СНИЛС 証明書とともに提出し、手続き自体はわずか 5 分で済むのですが、ここでも窓口が混雑しています。この 9 月に留学生とともに手続した時は、順番待ち整理券を受け取って、3 時間待つことになりました。手続き終了後、窓口担当者は、留学生のパスポート情報、СНИЛС 番号、電話番号をシステムに入力しました。

事前に SIM カードを購入し電話番号まで登録していた場合は、システム入力後携帯電話の SMS に Госуслуги へのログイン用パスワードが届きます。Госуслуги へログインする際、СНИЛС 番号とこのパスワードを入力します。ログイン後、独自のパスワードを設定して、電話番号を認証し、アカウントが「認証済み」（Подтверждённая учётная запись）となったら、Госуслуги が利用できるようになります。

理論的には、МФЦ で СНИЛС の取得と Госуслуги のアカウント登録を同時に行うことができるのですが、実際にはそれぞれの窓口が混雑していて、この 9 月に手続きした際には同時に完了することができませんでした。

③ 生体認証データの登録:

次のステップは、銀行または携帯電話会社（メガフォン）での生体認証です。銀行では、職員が身分証明書をチェックして本人確認を行った後、顔の撮影と声の録音を行います。声の録音では表示される数字をロシア語で発音するよう求められます。



生体認証の読み上げ用紙

生体認証の費用は国のサービスのため無料ですが、銀行で生体認証を行う場合、その銀行の顧客であるという条件が付けられる場合があります。ただし顧客になるためにはロシアの携帯番号を登録し口座を作る必要があるので、鶏が先か卵が先かという問題が発生します。他にも例えば、ズベルバンク（Sberbank）では、生体認証を登録する際に系列会社 Sbermobile の SIM カード購入を強く勧めらました。ただ、ズベルバンクはロシア最大手銀行なので、ここで口座を開設しておくと、ズベルバンクのアプリは使いやすくて、いろいろな支払いができるので、確かに便利です。

携帯電話会社 Megafon（メガフォン）の場合は、Megafon の契約者であれば、生体認証の登録が可能です。担当者によると、将来的には Megafon で、СНИЛС の申請、Госуслуги への登録、そして生体認証を一度にまとめて行えるようにしたいとのことです。

④ 電話番号の確認と有効化（アクティベート）

生体認証データ登録を完了した後、Госуслуги で携帯電話番号をアクティベートします。「サイトに提供完了（услуга оказана）」の通知が届けば、5～10 分後にロシア国内携帯電話が使えるようになります。

手続きの概要は以上です。

仕組みはまだ変わる？ 常に情報更新が必要

9 月は新しい年度の始まりで、外国人学生や労働者が集中する時期であったため、携帯電話の登録を希望する外国人が多く手続きに待ち時間が長くかかっていました。まだ新しい制度であるため、システムが不安定だったり、熟達したスタッフが不足したりしているという状況もあります。

Megafon の場合、サイトで生体認証ができるオフィスを調べ、事前にコールセンターへ電話して再確認したにもかかわらず、数時間後に当該オフィスに出かけたところ、手続担当者が不在で（生体認証担当者の勤務時間が限られている／午前中のみまたは〇曜日のみなど）、生体認証ができなかったという事例も聞きました。そのほか、機器の故障もときどきあるようです。

始まったばかりの新しい制度のため、手続きの流れがクリアになっていない部分もあり、今後徐々に改善されていくことが期待されます。銀行が携帯電話会社と提携して、外国人のためのワンストップサービスを始めるという話も出てきています。

まだロシアの法制度やシステムは改変される可能性があります。これからも常に新しい情報を仕入れ、更新していく必要があります。

個人の力で面倒な手続きをすべてやり遂げるのには限界があります。JIC では、変化するロシアのシステムに柔軟に対応しながら、モスクワやサンクトペテルブルグ、ウラジオストクでのロシア国内携帯電話の取得手続きのサポート体制を整備し、長期滞在者や留学生へのケアー・支援システムを充実していく予定です。

投稿《旅行記》

ロシア視点で見たハルビン・長春の旅

菅原 信夫

（一般社団法人 SRC 湘南ロシア倶楽部・専務理事／一般社団法人ディレクトフォース国際研究ユニット・代表幹事）

【背景】

本年５月、私（菅原）は４名の仲間と共に中国のハルビンと長春を４泊５日で訪問しました。皆、一般社団法人 SRC というロシアを研究対象とする団体のメンバーです。SRC では「ロシアを国境外側から見る」というテーマのもと、昨年はフィンランド、エストニア、そして本年はハルビン・長春を訪問しました。旅のアレンジはもちろん JIC さん。我々には非常に信頼できるパートナーです。

【ハルビンの感想】

成田からの直行便が到着するハルビンはそもそもロシア人によって作られた街です。1920 年代には中国人 20 万人、ロシア人 10 万人が暮らす近代都市となり、「東方のモスクワ」、「東方の小パリ」などとも呼ばれました。1930 年代には満州国の建国に伴い日本人の流入が増えて、ピークの 1944 年には 15 万人にも膨れ上がったそうです。

そんなハルビンでロシアの残した遺物を見るのが今回のツアーの第１主題でした。

１．建物

ロシア正教の教会をはじめ、多くの西洋建築物が建設され、現代にその多くが残っています。ロシア建築のみならず、アールヌーボー、アールデコ、バロック、折衷主義など多くの様式で建てられた建築物を見る建物ツアーが出ているほどで、建物見物だけで数日はかかると思われます。

ハルビン市内にたくさんあるロシア土産の店。中に入ると、ロシアでは見かけないロシア製品と書かれた商品がたくさん並んでいました。ロシア産品で、中国でコピーできないものはないので、多くは中国産ではないかと感じました。そのためか、お客は稀でどの店も空いていました。

上の写真は、ハルビン市内中央大街からも近い聖ソフィア大聖堂。宗教的活動は行われていませんが、その装置としての聖堂は綺麗に残されており、中国政府の方針がよくうかがい知れます。

元のハルビン学院校舎。現在改装中で、どうやら今後何かに使われるようでした。ここで多くの日本人、中国人が共にロシア語を学び戦後も卒業生が日本の大学や貿易業界で活躍しました。

ロシア建築の遺産というよりもアールヌーボー建築と考

えた方が正しい旧ロシア人住居の内部。建築史研究家より詳しいお話を伺いました。

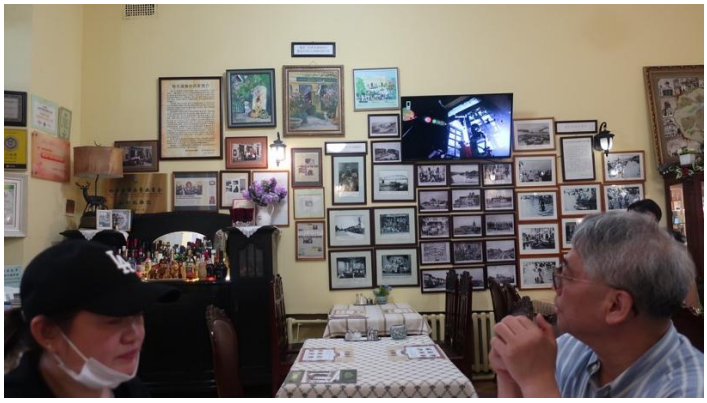
２．食事

個人的に最も関心が高かったのがハルビンのロシア料理。これが今回のツアーの第２主題でした。

我々の泊った中央大街にも老舗のロシア料理店が３軒もあり、それぞれがしっかり客を掴んでいることに驚きました。味については、ウラジオストックから近いこともあり、相当本格的なロシア料理を味わえると期待したのですが、料理名はロシア風ですが味はかなり違い、味付けは甘さが目立ちました。本場のロシア料理を知る我々には却って日本のロシア料理の方がよりロシアに近いと感じられました。

それでも店内にロシア人の写真などが飾られ異国情緒を演出、中国人の若いゲストに向けて戦前のハルビンを懸命に演じていることはわかりました。

中央大街にあるロシア料理店「タトス」。地下１階がレストランになっていて、100 席以上はあると思われる大箱でした。メニューには多くのロシア料理が載っていて、注文するとすぐに運ばれてくるのが印象的というか不思議。味は日本のロシア料理の方が上、という感じでした。



これは別のロシアレストラン。壁中に昔のロシア人の写真が貼られていて、この店がロシア人にいかに愛されていたかを示していましたが、今となっては全てが幻です。

３．ロシア企業

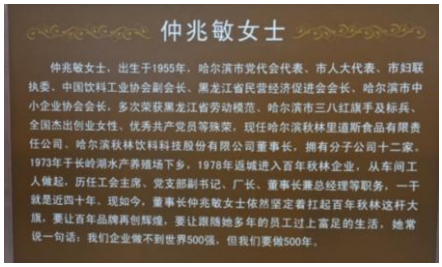
ロシア研究の観点から、海外に残ったロシア企業がどんな変遷をたどり現在に至るのか、海外で活動するロシア企業があまり多くないので、ハルビンのロシア企業は大変気になる存在です。

今回、我々はハルビンで活動する企業グループ「秋林公司」の飲料生産会社「秋林飲料生産企業」を訪問し、1930 年代から現在までの企業の沿革を伺うことができました。

聞いたところでは、同社に限らずロシア人起源の会社は全て中国企業となり、経営も中国人が行なっているそうです。ちなみに秋林飲料はロシア起源の「クワス」という発酵飲料で一躍有名になり、その後ハルビンの町中にそのクワスを提供するスタンドを作りました。このため、多くの人が「秋林」（チューリン）という名前を知っていますが、その起源は Churin というロシア人創業者の苗字から来ています。現在の経営者は仲兆敏という 1955 年生まれの女性。現在こそバリバリの中国共産党員のようですが、この会社で一工員から社長にまで上り詰めた人だと紹介されていました。

秋林（Churin）グループで最大の事業はハルビン市内でのデパート経営です。この写真は中央大街にある秋林デパートの建物。

ロシアではクワスは決して高級品ではありませんが、ハルビンでは綺麗なアウトレットがたくさんあって、ベースのクワスにフルーツをミックスしたような不思議な飲み物をかなりの価格で提供しています。



Churin 父子の紹介は皆無でしたが、現在の社長である仲兆敏氏の紹介は詳細です。仲氏がまさに中国共産党の求める人材であることがこ

の銘板から読み取れます。＜私たちは世界の 500 社に入ることはできないが、500 年続く企業になる＞という部分が中国企業の性格を表しています。

【長春の感想】

長春は、日本による満州経営の中心地にして、日本軍部の影響が極めて大きかった土地。満州建国時点から当時のソ連は満州の仮想敵国であり、ロシア文化が根付く要因はないため、私たちが眼にするロシア遺産は皆無でした。

【今回のツアーを総括して】

満鉄が走っていたハルビンから大連までの幹線を今、高速鉄道がハルビン－長春をわずか 1 時間で繋いでいます。そんな距離にも関わらず、両都市の性格は全く違い、個性に乏しい中国都市という私個人のイメージを見事に覆してくれました。

ハルビンの街にロシア人の姿はほとんどなく、ロシア人の作ったハルビンの街は今や完全に中国の街となりました。逆に言えば、ロシア人の作る文化、経済は外地においては根付くことが難しく、ロシア以外の土地で繁栄している姿を見ることはありません。

一方、中国人は中国外において活発な活動を行い、各地に中華街を作り、まさにチャイナワールドの実現を競い合います。この中国人とロシア人のバイタリティーの差が、中国人をして「ロシア何するものぞ」という姿勢を作り出していると感じます。満鉄の名物列車「あじあ号」の食堂車ではロシア人ウエイトレスが売りでしたが、ハルビンにおいてもロシア人のステータスは決して高いものではなかったようです。外地におけるロシア人の生活遺産を見ることで、ロシア人の精神構造というものがちょっとわかる気がしました。ただ、一概にロシア人といっても白系ロシア人と言われる社会主義ソ連と敵対して逃げてきた人々、そのかなりの部分がロシア系ユダヤ人だったというような複雑な問題もあり、ハルビンを通してロシアを見るというスタンスの有効性は続きます。

第 2 回国際会議「ロシアと日本：持続可能な発展への道」へ参加して

五十嵐　徳子（京都外国後大学教授）

2025 年 9 月 12 日、サンクトペテルブルグ経済大学のガスプロムホールで、第 2 回国際会議「ロシアと日本：持続可能な発展への道」が開催された。第 1 回は昨年 11 月 24 日に同大学の同ホールで開催された。日ロの学術・文化交流は、現在の厳しい状況下でも絶やしてはならないという故藤本和貴夫先生（大阪大学名誉教授、元大阪経済法科大学学長、大阪日本ロシア協会理事長）の強い意志のもと、サンクトペテルブルグ友好の家と同大学の協力を得て本会議が実現した。実は、藤本先生は第 1 回会議に日本側団長として参加する予定だった。しかし、昨年 10 月に駅で転倒し、怪我を負われた。それでも先生は、最後まで参加への強い意欲を示し、「主治医にはまだ言っていないが、無理をしてでもペテルブルグの会議に出席したい」と語っていた。私も先生が団長として同行してくださると信じていたが、残念ながら体調が回復せず、私たちだけで参加することとなった。

第 1 回会議終了後、ロシア側からは「来年は藤本先生にもぜひ参加してほしい」との温かい言葉をいただいた。そして、第 2 回会議が実現した。しかし、藤本先生は機能回復手術直後に脳梗塞を発症し、2025 年 4 月 22 日に逝去された。先生の葬儀には、サンクトペテルブルグ経済大学学長や友好の家の理事長から心温まる追悼文が寄せられた。会議の冒頭では、経済大学側が藤本先生の写真と紹介を掲示し、黙祷の時間を設けてくださった。今回の会議には、筆者を含む 4 人の日本人研究者とロシア側 5 人の研究者が多様なテーマで報告を行い、活発かつ真摯な議論が交わされた。その中で、会場の大画面に映し出された藤本先生の写真を見たとき、先生が本当に亡くなられたことを初めて実感した。藤本先生のイニシアチブがなければ、この会議は存在しなかっただろう。困難な状況下でも交流の大切さを改めて噛みしめながら、この報告文を書いている。

第１回「徳山あすかのロシア生活」

伝統文化を現代風に楽しむ旅

カルムイク共和国

9 月下旬、ロシア南西部カルムイク共和国の首都エリスタに行ってきました。もともとモスクワに親しいカルムイク人の友人がいるため、カルムイクには何度も行っていたのですが、久しぶりの訪問となりました。昔はモスクワから 2 時間で行ける直行便が毎日飛んでいてとても便利でした。今では直行便も毎日ではなく、片道 3 時間半かかるようになってしまいました。アストラハン州北部にあるミサイル実験場の上空を飛ばないようにするための措置で、迂回ルートとしてカスピ海の上を通っているため、余計に時間がかかっているのです。

カルムイク人と言えば、16 世紀末から 17 世紀にかけて西モンゴルから移動してきた騎馬民族。外見は日本人にもよく似ており、チベット仏教を信仰しています。カルムイクはよく、ヨーロッパの仏教国とも呼ばれています。この度は、第 3 回国際仏教フォーラムの取材で、首都のエリスタを訪れました。世界各国の僧侶が一堂に会する姿は壮観でした。この枠内では様々な文化プログラムが開かれ、年に一度の音楽祭もこのタイミングに合わせて行われました。民族楽器「ドンブラ」を 1000 人で演奏し「三宝」（ブッダ、ダルマ、サンガ）に供えます。会場となったのはフルルと呼ばれる、カルムイクで最も大きな寺院です。

比較的最近オープンしたテーマパーク「ツェレン」に行ってきました。ここではカルムイクの文化を体験したり、馬やラクダに乗ったりできます。テーマパーク内にはユルタ（ゲル）が立ち並んでおり、その中で講習会やレクリエーションが行われています。私たちにカルムイク文化を語ってくれたのはエフゲーニーさんという方で、トークが抜群に上手く、ただのガイドさんではなさそうだと思ったら、なんと地元の新聞社の編集長でした。ちなみにカルムイク人は、カルムイク語由来の名前の方もいますが、ロシアの伝統的な名前の方も多いです。

エフゲーニーさんは、カルムイクで使われている、羊の骨を使った知育おもちゃや、チェスのセット（カルムイク人はチェスが大好き）、知恵の輪などを見せて解き方を実演してくれました。どれもかなり難しいです。更に、緑色のカレー粉のような、何かを固めた分厚い板を見せてくれました。それは実はお茶で、カルムイク伝統のお茶を作るのに欠かせないものです。カルムイクのお茶は、緑茶をベースに、牛乳、バター、塩、スパイス、香草が入っています。それだけ聞くと日本人の口には合わなさそうな気がしますが、飲んでみると、すっかりハマってしまう人が多いです。草原の長旅に耐えるため、カルムイク料理はスタミナがつくものが多く、お茶も例外ではありません。

フルルで行われた音楽祭

カルムイクのお茶

エフゲーニーさんは、カルムイク書道のマスターでもあります。私の名前もカルムイク語で書いてもらいました。筆さばきも、完成した作品も、とても綺麗です。近年はロシア国内からの観光客が増えており、自分の名前を書いてほしがる人が多いため、書道教室は賑わっています。カルムイク語を日常的に話している人はかなり少なくなり、普通の公立学校ではカルムイク語を教えていないため、自発的にお寺などで学ぶ必要があります。

カルムイク書道

カルムイク語で名前を書いてもらった

カルムイクのグルメ

カルムイクの美味しいものと言えば、肉。カルムイク人は牛肉と羊肉をよく食べます。カルムイク人に言わせると、鶏肉は肉ではなく、野菜のカテゴリーに入るのだそうです。今回は羊肉の伝統料理、キュルをご紹介します。簡単に言うと、羊の胃袋に塩を振った羊肉を詰め、それを土に埋めて時間をかけて火を通すだけの料理です。見た目は食欲をそそる感じではなく、全く SNS 映えしませんが、その美味しさ、柔らかさは、他に比較しようがありません。羊の旨みがこれでもかと凝縮されており、部位によって、繊細だったり、肉のしっかりした風味を感じたりと、色々な味を楽しめます。

肉は市場に行けばとても新鮮なものが売っていますが、キュルを食べるとなると話は別です。キュルは、時間や人数、お金、キュルを作ってくれる職人、肉を埋める土地、穴掘りの労力など、全ての条件が揃わないと食べられないのです。羊の胃袋を手に入れるには一頭買いしなくてはならず、結婚式や、よほど大事なお客が来る時でないと、キュルを作ることはありません。

伝統料理「キュル」

私がこの料理の存在を知ったのは、数年前。当時モスクワ在住だった友人、藤田夕子さんのおかげでした。藤田さんは、カルムイク旅行で数日だけ過ごすつもりが、とても気に入って 3 週間も滞在し、カルムイクの食文化を知り尽くしていたのです。彼女が事前にキュルの手配を頼んでいてくれたおかげで、この素晴らしい料理を味わうことができたのです。

キュルに関するエピソードはたくさんあり、草原で戦いに行った兵士が夜にご飯を食べられるように、朝に準備しておくという話や、キュルを食べた後に水を飲んで消化を遅らせることで、次の日に丸一日食べなくても戦えるようにした、という話があります。食とライフスタイルは、つくづく切り離せないものだと感じます。

今回の出張で、人生で 2 回目のキュルを食べることができ、感無量でした。やはりとても美味しかったのですが、今回は仏教フォーラムでロシア国内外から VIP ゲストが来ていた関係で、一気に羊 8 頭分のキュルを作ったとのこと。できてから少し時間が経ってしまっていたので、藤田さんが頼んでくれたキュルには、ほんの少し美味しさが叶わなかったように思います。

カルムイクのサムライ

カルムイクで眠る日本人がいます。96 歳（本人と家族談。公式記録は 90 歳）でお亡くなりになったナカガワ・ヨシテル（中川義輝）さんです。山形県出身、北海道育ちのナカガワさんは、戦後にサハリンで捕虜となりました。その後、日本に戻ることなくソ連国籍を取得し、ウズベキスタンやダゲスタンなど、仕事も住む場所も変えながら、西へ西へと移動していました。そんなナカガワさんが、最後に見つけたのがカルムイクのユージヌイ村だったのです。

ナカガワさんがユージヌイ村に移住したのは 1972 年。2000 年代に入って厚生労働省の調査が入り、彼が日本人だと明らかになってからは、「カルムイクのサムライ」として一躍有名になり、何度もテレビで紹介されました。ナカガワさんはロシア女性リュボーフィさんと結婚していました。リュボーフィさんは、もともとクラスノダール州から、最初の夫と子ども達と一緒に、ユージヌイ村に移住。最初の夫がアルコール中毒で亡くなり、喪が明けた時、ナカガワさんが声をかけてきて交際が始まったのだそうです。その後 2 人は、31 年間連れ添いました。ナカガワさんは日本に一度だけ帰国したことがあり、親族に再会しました。その時に望めば日本に戻って永住することもできたそうですが、リュボーフィさんとユージヌイ村での生活を選び、そこで生涯を終えました。

ユージヌイ村は、首都エリスタから車で 2 時間ほど、道な

き道を行ったところにあります。私は一度だけリュボーフィさんにお会いしたことがありますが、その時の彼女の憔悴ぶりが忘れられません。私は残念ながら生前のナカガワさんにお会いする機会はありませんでしたが、リュボーフィさんによると、ナカガワさんは魚釣りが趣味で、釣った魚は何でも食べ、お酒は一切飲まず、本当に良い人だったとのことです。2人は20歳近く離れている年の差婚でしたが、とても仲良しでした。

ナカガワさんのお墓に立っている記念碑は、在モスクワの日本人有志でお金を出し合って建てたものです。最初はお墓に木製の十字架を立てていましたが、風が吹くたびに倒れており、お金がなくてちゃんとしたお墓を建ててあげられないことをリュボーフィさんは気に病んでいました。その話を聞いて皆で寄付することにし、記念碑が無事に建立されたタイミングで、有志でお墓参りに行きました。リュボーフィさんは涙を流して喜んでくれ、私たち日本人一同ももらい泣きしました。

カルムイクのこれから

今回の出張では、カルムイク・ジュエリーの店に立ち寄りました。こんなにおしゃれな店は、これまでに見たことがありませんでした。カルムイクの象徴である野生のチューリップをモチーフにした様々なアクセサリーが売られており、観光客相手に飛ぶように売れていました。よくみるとクッションもチューリップの形だったり、壁にかけられた絵も素敵です。オリジナルの絵葉書も売られており、少しでも稼ごうという気概を感じました。

カルムイク・ジュエリーの店

また、去年できたばかりのアパレルメーカーも訪問しました。従業員がまだ数十人しかいないところ、バングラデシュ人の30代男性が5人ほど働いていました。聞いてみると、子どもの頃からバングラデシュの縫製工場で働いている方達で、若くてももうベテラン。短期間カルムイクに滞在し、技術を教えているのだそうです。会議室では従業員の子どもたちが塗り絵をしており、アットホームな雰囲気です。

カルムイク文字をあしらったTシャツや、騎馬民族の勇ましい姿など、民族的なモチーフが美しくデザインされていました。この会社は自社のマーケットプレイスを立ち上げて、通販で直売を始めたところです。このような、地元の良さを活かして新しい商売に繋げる、地域ブランドを向上させるという動きが広がっていることを嬉しく思います。

とは言え町中では、良い意味で田舎っぽさを感じます。モスクワでは全く見なくなったマルシルートカ（乗り合いワゴン）が走っており、いまだに現金払い（しかし携帯番号による銀行振込も可）。降りる場所を大声で運転手に言わないと停まってくれないなど、昔のルールが残っていて新鮮です。手を挙げてマルシルートカを停めないといけないのも、旅行者にはハードルが高いです。私もトライしてみたのですが、1台目が停まってくれなかったため、それを見ていた警官が警棒を差し出して、私のために次のマルシルートカを停めてくれました。

町中にはどこにでもマニ車があります。赤い円柱状で、側面にはマントラが刻まれています。これを時計回りに3回回すことで、功徳を積むことができます。見かけたらとりあえず回していると、なかなかお散歩が前に進みません。

エキゾチックな魅力がつまったカルムイクは、ロシアにいながらロシアでないような、どこか懐かしさを感じさせる不思議な場所です。仏教フォーラムをきっかけに6つのホテルが新設され、道路や信号機などのインフラの状況もかなり良くなりました。機会があればぜひカルムイクの旅を楽しんでもらいたいと思います。

（とくやま・あすか／モスクワ在住ジャーナリスト）

日本政府は 9 月 10 日、日ロ友好の象徴となってきた施設である「日本センター」について、ロシア全土 6 か所すべての閉鎖を決定したと発表しました。日本センターは、ソ連邦解体後、ロシアの市場経済改革を支援する目的で 1994 年からモスクワやウラジオストクなどに設置され、経営セミナー、日本語講座、ビジネス交流などを通じて人材育成を促進し、日ロ関係の改善と緊密化に貢献してきました。しかしながら、22 年 2 月のウクライナ侵攻を受けて、日本センターの活動は縮小され、日本語講座とロシア所在日本企業への支援事業以外は、原則見送りとされてきました。本年 1 月にロシア政府が日本センターに関する政府間覚書を終了させると発表したことや、最近ロシア内務省がウラジオストク日本センターに立ち入り検査を実施したことなど、活動の制約が強まったことが閉鎖の理由だと説明されています。残念なことです。

日本センターの閉鎖は、日ロ関係の今後の維持・改善にとって大きな損失とならざるを得ません。モスクワおよびサンクトペテルブルグの日本センター所長を歴任された朝妻幸雄氏に、日本センターが果たしてきた役割やその活動内容、今後について寄稿していただきました。（編集部）

日本センターの閉鎖について

関係を繋ぎ留める努力、今こそ必要

朝妻 幸雄（日露ビジネスコンサルタント／日ロ交流協会顧問（前会長）

9 月 10 日付で朝日新聞はじめ各紙が次のようなニュースを報じました。

『日本政府は、ロシア国内 6 カ所で経済分野の人材育成などを支援してきた「日本センター」をすべて閉鎖すると決めた。林芳正官房長官が 10 日の記者会見で明らかにした。』

この報道によれば官房長官は閉鎖決定の背景について、『総合的な判断として、歴史的な役割を十分に果たした』と述べています。

設立以来 30 年間にわたって現地に密着して両国間の経済関係の推進を担い、文化交流面で両国の関係を草の根で作ってきた日本センターでしたが、この一言であっけなく閉鎖されました。私はこの報道をとても残念な気持ちで読みました。ウクライナ紛争が始まってから両国の関係悪化によってセンターの活動は多くの困難に直面してきましたが、苦難を克服して持ちこたえてきました。やがて紛争が終結して日ロの政治・外交関係が正常化する時に経済をはじめ両国の諸分野の交流発展の足場として残しておくべき組織でした。

ところで日本センターという組織は一体どのようなものだったのでしょう。日本ではあまり知られていなかったかもしれませんが、むしろロシアの中ではかなり広く知られていました。この紙面を借りて、改めて組織の概要と活動について簡単に紹介したいと思います。

日本センターとは！

ソ連が崩壊して間もなく両国の政府間の合意に基づいて組織の立ち上げが決まりました。設立の目的はロシアの市場経済への移行を支援することにありました。

ビジネス研修セミナーの参加者たちと

ソ連は1988年から1991年にかけて内部分裂が進んでいましたが結果としてソ連崩壊をもって 15 の独立国家に分解されました。その中で最大の国は言うまでもなく新生“ロシア連邦”（以下ロシア）でしたが、誕生と同時にそれまでの社会主義経済を捨てて資本主義経済に移行しました。しかしロシア革命以降 70 年間という長期にわたって国家主導で運営してきたシステムを変えることは容易ではありませんでした。社会主義計画経済こそがすべての国民が平等に富を分け合える理想的なシステムであり、資本主義経済は貧富の格差を生みだす邪悪な経済システムと教えられてきたのですから、“今日から市場経済体制に移行します”と突然言われても線路のポイントのように方向を変えることはできません。そもそも新しい線路はまだ出来ていなかったのですから。市場経済の経

験も知見もゼロでしたので運営方法を知る人はいません。必然的に経済は行き先を失い脱線しました。激しいハイパー・インフレや無秩序なマフィア経済が横行するダッチロール状態に陥りました。

そこで冷戦に勝利した西側各国は新しい仲間となったロシアに対して、上から目線ながらも鷹揚に支援の手を差し伸べることにしました。旗頭であった米国はハーバード大学のジェフェリー・サックス教授を派遣して、当時 35 歳の若さで経済担当副首相に抜擢されたエゴール・ガイダール氏を中心に急進的経済改革を指導しました。しかし一向に立ち上がることができず混乱の度合いはますます深みにはまっていきました。

その頃日本政府はロシアの市場経済改革支援の一環として輸出入銀行（現在の JBIC）を通して人道支援枠と称する融資システムを策定して物資や資材の提供を行うと共に、市場経済下における企業経営などの教育を行う制度を決定したのでした。後者を実現するために日本外務省は支援委員会事務局を立ち上げて日本センターを設立しました。1994 年のことでした。

ロシア経済を担い、日露経済関係の発展に資すると期待される人材を育成することが目的でした。これによってロシアの各都市に日本センターが順次開設されていきました。モスクワを本部としてハバロフスク、ウラジオストク、サハリン、サンクトペテルブルク、ニジニー・ノヴゴロドと６都市に全部で７つのセンターを開設しました。（当初モスクワには指導すべき企業数が多いことからモスクワ大学とプレハーノフ経済大学に二つの日本センターが開設されましたがその後に統合されたので全部で６センターになりました。）

それぞれの日本センターの所長には主として商社などでロシアでの勤務経験を持ち、ロシア語を理解するエキスパートが派遣されました。ロシアの企業と円滑にコミュニケーションをとることが必要だったためです。各センターには日本人スタッフ、ロシア人スタッフが配置されて真剣に業務に取り組みました。そこには一般財団法人日本国際協力センター（JICE）や IFA（国際フレンドシップ協会）などが大きな力を貸してくれました。

経営セミナーにおける学習テーマ：

日本センターでは経営セミナーを常設的に実施し、市場経済の運営方法を知らないロシアの若い企業家たちに対して日本で蓄積されてきた経営ノウハウを直接伝授することにしたのです。主な講座のテーマは経営、金融、貿易、マーケティング等の分野でしたが具体的講座名は品質管理、人事労務管理、中小企業、看板方式（トヨタシステム）、顧客満足、運輸・物流等々多岐に及びました。講師として日本の企業や大学などから各分野の専門家が派遣されました。テーマによっては所長がレクチャーを行うこともありました。

受講した経営者やマネージャーたちは、これらのテーマの授業を通して市場経済下での企業運営、競争力、ビジネスモラルなどを学び、その後の自社の企業運営におおいに役立ちました。過去の計画経済では重視されていなかった内容でした。授業は教室における座学だけにとどまらず、更に日本での OJT という形でも行われていました。レクチャーの最終日にテストを実施してそこで優秀な成績を収めた受講生には訪日研修で更にブラッシュアップする機会が与えられていたのでした。旅費は全額日本側の負担でした。

当時ロシア企業や個人にとって訪日は容易でない環境にありましたが、両国のお墨つきでの訪日の機会は大きなインセンティブになり、競争力も高いものになりました。それだけに優秀な受講生が集まってきたのです。みんな熱心であり吸収力も抜群でした。2019 年までの間に約 45,000 人のロシア人企業家がロシアでのセミナーを受講し、そのうち累計で数百名が日本を訪問して、企業のオフィスや工場の現場で追加的な教育を受ける機会が与えられたのです。彼らは日本で学んだ知識を生かして自社の経営改革を押し進めることができたのです。中には学んだことを活かして会社を立ち上げた人も少なくありません。

ロシア政府の対応

当時ロシア政府としても西側の経済システムを一日も早く習得して将来の経済発展に資する基盤を作ることが重要な国家課題であったので大統領府の肝いりで日本センターとの協力が勧められていました。その名も“大統領プログラム”と命名されて西側の経験に学ぶ受け入れシステムができました。それは「企業経営者養成計画」として毎年カリキュラムを含む実行計画が策定されました。更に経済発展省の中にロシア経営者養成委員会が組織され、各連邦管区の中にもその支部ができました。こうして全ロシアを網羅的に西側に学ぶ体制が整えられたのです。この教育システムでは特に日本とドイツが最も貢献していました。

2000 年にプーチン氏が大統領に就任してからは西側の支援による企業教育が一層強化されました。因みにプーチン大統領の右腕として要職を歴任してきているセルゲイ・ナルイシキン氏は格別に熱心であり、日本センターの事業に対して謝意を表明し、同窓会との会合にも出席して参加者たちを激励しました。筆者も同氏とは直接打ち合わせの機会を持ってきました。

基本的に受講生は申請書に基づいて所長が決定していましたが、数名は連邦管区の経営者養成委員会や地方支部からも推薦があり、所長はその人物の所属企業や個人の資質を審査して受講の可否を決めていました。

なお、レクチャーは日本センターだけでなく、上述した経営者委員会支部のある都市にも出向いて行うこともありました。いわばレクチャーの出前ですが、《出張講座》と称して広いロシアの各地の企業にも経営ノウハウを指導すると共に潜在的ビジネスパートナーを養成してきたのです。

日本センターの同窓会について

それぞれの日本センターには訪日研修を受けて帰国したものたちを対象とした同窓会というものが組織されていました。同窓会員たちは日本の経営の現場で学習しただけではなく、帰国後も日本のパートナーとの間でビジネスや事業を始めたものが少なくありません。同窓会は日本センターの財産であるだけでなく、日本ビジネス界の貴重なパートナー団体でもありました。その後会員たちは日ロ関係の貿易や各種経済協力が発展する核になっていったからです。

更に『日露貿易投資促進機構』の枠組みの中、両国の経済関係を強化するため積極的に活動を開始しています。そうした枠組みの結果として徐々に成果があがり、同時に近年両国の貿易量が増えつつあるのは誠に嬉しいことです。特に 2006 年以降は輸出入ともに順調に増加して 2013 年には 350 億ドルを記録しました。しかしその後はクリミア併合の折に日本を含む西側諸国によるロシアへの経済制裁がはじまり収縮していきました。

日本語教育

日本センターにはもう一つ非常に重要な側面がありました。ロシアのビジネスマンたちに対する日本語教育です。日本語を通じて円滑に意思の疎通を図ることは、ビジネスの推進だけでなく両国民の相互理解を深めるために大変重要です。具体的な例をあげると例えばサンクトペテルブルク日本センターでは、日本語講座に常時 150 名のビジネスマンを受け入れていました。受講生たちは昼間の仕事の後に日本語を勉強出来る環境を整えていました。彼らの日本語学習意欲は非常に高く、習熟ぶりは眼を見張るばかりでした。日本語は初級クラス、中級クラス、専門課程とそれぞれが１－２クラスあり多くのロシア人が学んでいました。授業は夕刻から始まります。職場で仕事を終えてから日本語を学びに日本センターを訪れるためです。それだけに熱心であり、ベテランの教師陣も一生懸命に教えていました。

付け加えるなら日本語講座は日本語の習得だけにとどまりません。文化交流の面でも大きな役割を果たしてきました。日本語を学んだ受講生たちは文化行事である“日本の春”や“日本の秋”に積極的に参加をして日本の伝統的文化に親しんできました。そこには大人だけでなく、多くの子供たちをも含めて日本の折り紙、季節ごとの伝統行事、着物の着付けなどに親しんできました。日本語教育は日本ファンの層を厚くすることに貢献してきたのです。

サンクトペテルブルグにある広大な国立植物公園には日本庭園がありますが、そこには日本の茶室が建設されています。この茶室は島根県の石州瓦や京都の聚楽壁を使った本格的なものです。実はこの建設にあたっては日本センターが助言をすると共に、建材の輸入の手続きなどを行ないました。ここには毎年５月ごろになると多くの市民が訪れて日本から運ばれた桜や牡丹の花を愛でています。また書道や武道などの実演が行われています。(写真参照)

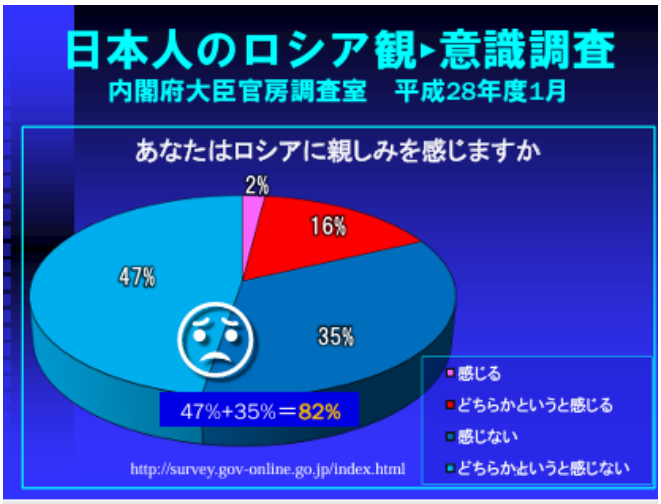
その他の活動：

上述の通り日本センターは外交関係で拾いきれない諸方面で日ロ関係推進のために活動をしてきました。たとえば日露両国における産学合同を視野に捉えて、両国の大学間の提携、企業と大学間の交流の推進にも努めてきました。一般にロシア人は学習意欲が高く、政府も大学も留学を含む教育制度を強化してきました。そうした中で隣国日本への留学熱も年々高まっています。ウクライナ紛争勃発後は相互の留学生の数は縮小しましたが、熱意は衰えていません。大阪大学はサンクトペテルブルグ国立大学との間で交換留学制度を含む提携関係にありますが、ここに至るまでに日本センターが提携前にサンクトペテルブルグ大学との間で橋渡しを行ない、調印式に向けてもアレンジを手伝ってきた結果でもありました。

ビジネスマッチング

その他にも日本センターにはビジネスマッチングという重要な任務がありました。両国間のビジネスを推進すること

でした。ロシアのビジネスについて経験がない多くの日本の企業が訪ロして、新たにビジネスを始めるにあたって日本センターがロシア企業の紹介をしました。結果として日本企業は安心して取り組めるロシアの取引先と知り合うことができて新しいビジネスの取り組みを始めることができました。その結果市場が開拓されて日ロ間の貿易は幅が広がってきました。この活動によってロシアだけでなく多くの日本の企業から感謝の言葉を頂いてきました。



現在日露間の政治関係は極度に悪化しています。我が国は欧米諸国と足並みを揃えてロシアに経済制裁を科しています。対するロシアは反発して日本を欧米諸国と同様に非友好国に指定しました。地政学的変化に端を発した両国の外交関係における激震は当然のことながら経済分野に強いマグニチュードの破壊をもたらしました。それは日本の経済界にも日本にとっても大きなマイナスになっています。

更に追い打ちをかけるように起きたことが日本政府による日本センターの閉鎖決定でした。勿論ここに至るまでには紆余曲折がありました。前段として今年１月にロシア政府が日本との間で交わした日本センターの運営に関する覚書の適用を終了すると発表したことです。言うまでもなく日ロ関係の悪化が原因です。日本政府による経済制裁に対してロシアは強く反発をして日本を非友好国に指定するに至りました。

しかし長い歴史の中では現在の状況は一時的な異常な状態であって、決して長くは続くものではありません。両国が関係を修復し再構築する時が近く到来します。その時に民間ベースでの復活の足掛かりとなるのが日本センターによって築かれてきた民間ベースの関係です。日本との交流を強く望んでいる同窓会のメンバー達もその土台になります。彼らは昨今のビジネスが極めて困難な中にあっても、日本の友人たちとの交流を大事にしています。

今般日本センターが閉鎖されて、歴代の全日本センターの職員たちが心血を注いで作り上げてきたものがリセットされてしまいました。しかし日本センターが作ってきた成果と友好関係は決して過去のものにしてはいけません。これまで積み上げた成果は両国間の経済関係推進のための硬い基盤となって活きていくはずです。ロシア各地に居る日本ファンやビジネスパートナーが日本との交流を強く望んでいるからです。

一例としてハバロフスク日本センターではビジネスマンクラブが設立されていますが、彼らは政治環境の変化に左右されることなく現在も自費で訪日して企業訪問を繰り返していて、学びを続けながら新しいビジネスの構築を目指しています。

林官房長官は日本センターが歴史的役割を果たし終えたと述べたということですが、私は日本センターの本当の役割はこれから始まると思っています。どういう形であれ、日ロ間のビジネス、文化、日本語教育がなんらかの形で継承されていくことが重要と考えています。

おわりに

ロシアは隣国です。宗谷岬からサハリンのクリリオン岬の先端まではわずか 43 ㎞、マラソン選手が走って３時間以内で到達できる距離にあります。そのロシアには地下資源をはじめ日本に無いものが沢山あります。ロシアにとっても日本から得ることができる経験やノウハウがあります。双方の人口はそれぞれ一億を超えていて、きちんと経済交流ができれば市場を倍に拡大できます。つまり絵にかいたような相互補完関係にある隣国同士です。国益を真剣に考えるなら現状で満足できる筈がありません。

隣人との付き合いほど難しいものはないと言われますが、隣国なら多少の問題があってもきちんと話し合ってお互いに助け合う関係を作ったほうがいいに決まっています。遠い親戚よりも近くの隣人です。ロシアの人たちは日本が大好きです。

日本は政治的理由で欧米との関係を優先して隣国との関係を犠牲にしてきた 80 年の歴史があります。今こそリセットすべき時期にきています。それが長い目で見た国益です。

第 13 回　こんな時代にロシア語のすすめ

「電話が嫌い、電話が怖い」

黒田 龍之助

電話百周年記念切手

こんな時代にロシア語をやっている黒田って人は、やっぱりヘンなんだな。

そうお考えになっているとしたら、それは違います。ロシア語とは関係なく、わたしは昔から人とは違う行動をしてしまうのです。しかも、それを気にしていないんですね。

たとえば、イマドキ携帯電話を持っていません。スマホだけじゃなくて、いわゆる「ガラケー」も合わせて、そういうものは一切持ち歩かない。ポケベルもありませんでした。

先日、JIC のスタッフと会って食事をしたとき、帰りの駅で公衆電話から自宅に連絡を入れたのですが、皆さんから呆れられました。不便じゃないですかと、誰もが尋ねるのですが、たとえばバスが存在しなかった江戸時代の人に、不便じゃないかと問うてみても、相手はキョトンとするばかりではないでしょうか。もともと持っていなければ、何の不便も感じないのです。ただ、回りには迷惑に思っている人もいます。わたしと待ち合わせて、何かの加減で連絡がつかなくなったら、他に手段がないからです。その不安感を、教え子たちは「昭和のデート」と呼んでいます。

どうして持たないのか。だって、そういうのがあったら、仕事が増えちゃうじゃありませんか。怠け者のわたしには、ぜったい無理。でも、それだけではありません。電話は子どもの頃から嫌いで、保育園生の頃は自宅の固定電話が鳴ると、絶対に近寄ろうとはせず、遠巻きに見ているだけだったとか。そういう性格を持って、この世に生まれてきたのでしょう。

その性格に拍車をかけたのが、ロシア語でした。

旧ソ連時代の電話が通じないことは、当時は広く知られていました。当局から盗聴されているんだとか、いろんな噂がありましたが、その真偽はともかく、電話をかけるだけで一苦労だったことは、間違いないでしょう。

ところが、それが理解できない人もいたのです。ある団体が旧ソ連に行くときに、通訳として同行したのですが、メンバーのひとりが、モスクワから家族に電話したいといい出しました。お客さまのリクエストですから、こちらとしても無下に断ることはできません。ホテルのフロントに問い合わせたところ、先方はいろいろ調べてくれ、けっこう高い料金を払えば、明日の午後８時から９時の間に 10 分間だけ通話することができると教えてくれました。やれやれ、よかった、何とか連絡できそうだな。わたしはそう思ったのですが、これを伝えたお客さまは驚きました。そんな制限があるのか！娘がアメリカへ留学したときには、いくらでも電話がかけられたぞ。

はあ、でも、ここはソビエト連邦なのです。

お互いに電話をかけて声を聴きたいのは、どこの国でも同じ気持ちです。あちこちで知り合ったロシア人たちは、モスクワに来ることがあれば、レニングラードに寄るのだったら、是非とも電話してほしいといって、番号を書いてくれます。そこで通訳などで旧ソ連を訪れた際、夜に自由時間があるときには、ホテルの部屋から電話してみるのですが、これが通じた試しはほとんどありませんでした。受話器の向こう側から何か音が聞こえると思ったら、どうやら混線しているらしい。そもそもホテルに設置されている電話は、オモチャみたいに頼りないプラスチック製で、これで通話できるのが信じられませんでした。

それでも奇跡的に繋がることがあります。ソ連国内で電話の通じる喜びといったら、たとえ天国に通じたとしても、これほど大きくはないでしょう。ただしいつ通話が途切れるかわかりませんから、相手とは待ち合わせの時間と場所をすばやく決めます。わかりやすいのは地下鉄の改札口。これなら絶対に会えるはず。安心して、電話を切ろうとするのですが、そこでロシア人が、意外なことをいい出します。

「それでさ、あれからどうなった？」

つまり世間話をしてくるのです。おばさんに多いのですが、老若男女関係なく、連絡事項が確認できた後も、なんとなくダベりたいロシア人は少なくありません。奇跡的に繋がった電話だから、今のうちにせいぜい話しておこうというのでしょうか。

しかしながら、こちらは言語の不自由な外国人。とくに電話の会話は、相手の顔も見られないし、身ぶり手ぶりも使えませんので、負担が大きいのです。その困難な状況が、相手にはまったく理解できず、ふだん会っているときと変わらない様子で、とりとめなく話を続けます。わたしは調子を合せながらも、早く会話が終わってほしいと、そればかり願っていました。

電話にしかない魅力というものが存在することは、それでも理解しているつもりです。このことは、レニングラードで経験しました。

あるとき、年末から年始にかけてのツアーで通訳をしていました。正月を跨いでの仕事だったのですが、さすがに 12 月 31 日の夕方から 1 月 1 日の午前中はお役御免となり、自由時間ができました。そこで現地の知人に電話をかけてみると、奇跡的に繋がって、しかも大晦日を祝うから、これからバスに乗って自宅まで来いというのです。バスは電話と同じくらい苦手なのですが、なんとか乗り継いで、年末の一般家庭に寄せてもらいました。

ソ連時代の新年は宗教色なしでお祝いし、クリスマスツリーみたいなものが飾られ、深夜にソヴェーツコエ・シャンパンスコエというソビエト・スパークリング・ワイン（甘口）を飲む。そのときテレビでは、共産党書記長または大統領の演説が流れる。こういったことはどこかで聞いたことがあって、みんな知っていました。

でも 0 時になってクレムリンの時計塔の鐘が鳴ると、その場にいる人はお祝いのことばをお互いに述べ合い、それから知り合いにジャカジャカ電話することは、知りませんでした。日本ではそういう習慣がないと思うのですが、皆さんはいかがですか。

声を聴かせるというのは、やはり大切なんですね。わたしだって、親しい人と会えなければ、せめて声くらい聴きたいと思います。

さて、ロシア語の電話が苦手なわたしでも、語学力の進歩とともに、だんだんこなせるようになりました。好きではなくても、電話での受け答えはやっぱり必要です。

21 世紀になってから、わたしはリトアニア語の研修で、第 2 の都市カウナスで夏休み一か月間を過ごしたことがあります。宿泊は大学から遠くない場所に部屋を借りました。初日に大家さんと会い、カギを受け取りながら注意事項の説明を受けます。ロシア語が分かる年配の方でよかったです。滞在中もときどき電話をくれて、困ったことがないかと様子を尋ねてくれました。

あるとき、部屋の電話が鳴ったので、また大家さんから確認の電話だろうと受話器を取ったら、聞き覚えのない声がリトアニア語で何かまくし立てています。

昔のわたしだったら、さぞや慌てたことでしょう。しかし、そのときは違いました。

まずリトアニア語で「わかりません」といいます。そのくらい習いました。それからロシア語で続けます。「いいですか、ここは個人宅で、わたしは部屋を借りている日本人です。他に誰もおりません」

相手は一瞬、声を詰まらせ、それからロシア語で二言三言、遠慮がちに何かを尋ねるのですが、さっぱり聞き取れません。そこでさらに答えます。

「繰り返します。あなたの求める人はここにいません。電話番号を確かめてください」

いやはや、我ながらずいぶん態度が変わったものです。馬齢を重ねると、ずうずうしくなるのでしょうか。もうロシア語の電話も怖くありません。

でも、相変わらず嫌いです。

＜日ロ交流情報＞

あいちロシア協会の講演会（9 月 28 日）

「帝政ロシアの農奴劇場の世界」

9 月 28 日、あいちロシア協会（小林功会長）の第 1 回ロシアンサロン・講演会が、名古屋市内の会議室とオンラインの併用で行われました。テーマは「知られざる帝政ロシアの農奴劇場の世界」。昨年、著書『シェレメーチェフ家の農奴劇場：18 世紀ロシアのオペラ文化史』（道和書院）で日本演劇学会の河竹賞奨励賞を受賞した森本頼子さん（愛知県立芸術大学非常勤講師）が、オペラ・演劇・バレエ・音楽など今日のロシアの舞台芸術につながる帝政ロシア期の芸術文化活動について、当時の農奴劇場の資料や写真を紹介しながら、興味深く解説しました。

農奴劇場とは、富裕な一部のロシア貴族が、所有する農奴を俳優や音楽家に起用し、招待客を相手に公演を行った劇場とされ、18 世紀後半から 19 世紀前半にかけてロシア全土に 173 も存在したことが確認されているそうです。領主の土地

に縛りつけられ、自由に移動することも、領主の許可なしに結婚することもできなかった農奴たちが、その中でもある程度開明的な領主のもとで、ロシア文化の基層を作り上げてきたことがよくわかる講演会でした。

ロシア料理とロシア音楽の夕べ（9 月 27 日）

十三の中華料理店で本物のロシア料理を味わう

9 月 27 日、「ロシア料理とロシア音楽の夕べ」（主催；ムーザ芸術研究会、後援：大阪日ロ協会）が、阪急『十三』駅前の中華料理店「隆福」にて開催されました。会場は中華料理店ながら、調理するのはオレーグ・ゴルジェンコさんとセルゲイ・ズイリンさんというプロのロシア料理人。ビーツ（赤

カブ）を使ったサラダや、きのこスープ、ブリヌイなどロシア料理を味わいながら、主催者であるヨコタ村上孝之さんのバイオリン演奏（チャイコフスキーの「アンダンテ・カンタービレ」ほか）やロシア歌謡（モスクワ郊外の夕べ、黒い瞳など）を楽しみました。

風に舞う、情熱と哀愁のロシア音楽

大阪ロシア総領事館でアコーデオン・ライブ

バヤン（ロシア独特のボタン式鍵盤アコーデオン）をご存じですか？ 9 月 13 日、大阪・豊中市の在大阪ロシア総領事館にて、アコーデオン奏者後藤ミホコさんと、バヤンの名手スタス・ヴェングレフスキーさん（モルドバ出身、アメリカ在住）の競演によるアコーデオン・ライブが開催されました（主催；関西日ロ文化サロン）。コンサートは「黒い瞳」「百万本のバラ」など後藤ミホコさんのロシア歌謡の演奏に始まって、スタス・ヴェングレフスキーさんがピアノでさえ難しいピアノ曲、フランツ・リストのラ・カンパネラを 10 本の指で目にも止まらぬ速さで演奏、またスタスさん作曲のオリジナル曲を披露するなど、観客を魅了しました。

コンサートのあとは出演者やロシア領事館スタッフとともにロシア料理の立食パーティ。和やかな歓談が続きました。テルスキフ・アレクサンダー総領事が「どんな政治状況になっても、文化交流を通じて日露の友好関係を維持する必要がある」と力強くあいさつされたのが印象的でした。

今年も8月23日に開催(千鳥ヶ淵戦没者墓苑)

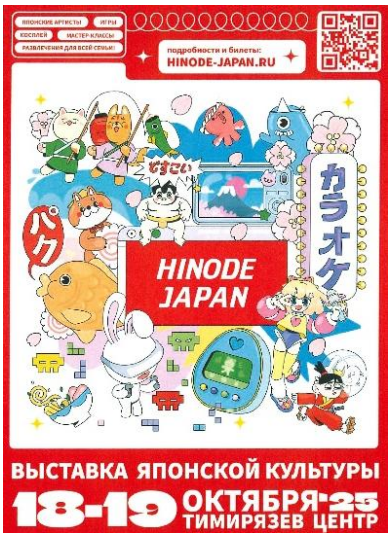
シベリア・モンゴル抑留犠牲者追悼の集い

今年もシベリア・モンゴル抑留犠牲者追悼の集いが、東京・千代田区の千鳥ヶ淵戦没者墓苑で、スターリンが「シベリア抑留」の秘密指令を発した 8 月 23 日にしめやかに行われました。存命の抑留経験者の平均年齢が百歳を超え、遺族も高齢化している中で、シベリア抑留の実態解明や犠牲者の遺骨収集はまだまだ十分に進んでいません。追悼の集いには、自民党・公明党・立憲民主党など各政党の代表があいさつに立ち、実態解明と歴史の継承に力を入れ、遺骨収集を押し進める決意を表明しました。

モスクワの日本文化フェスティバル

HINODE JAPAN 10 月 18-19 日開催

2012 年からモスクワで行われている日本文化の紹介イベント HINODE JAPAN 2025 が、今年は 10 月 18 日～19 日の 2 日間、モスクワのティミリャゼフセンターにて開催されます。今回は、大相撲の元力士(豊ノ島と大喜鵬)が公開稽古などを披露するほか、アニメ声優で歌手の平野綾のコンサート、画家やコメディアンなどの多彩なパフォーマンスが予定されています。



日本におけるロシア文化フェスティバルと同様、ロシアにおける日本文化イベントが、これからも活発に続くことを期待しています。

カラリョフ多久田バレエアカデミー

本場のバレエを神戸で！ワガノワメソッドで徹底指導

日本にいながら本場ロシアのバレエ・レッスンを受けることができる！

神戸・元町に多久田さやかさんとカラリョフ・アレクサンドルさんが 24 年 11 月に開設した「カラリョフ多久田バレエアカデミー」は、ロシアの国家バレエ教育学のディプロム（卒業証明）を習得したバレエマスターが、ワガノワメソッドの本格レッスンを指導するバレエ学校です。

多久田さやかさんは鳥取県出身。３歳でバレエを始め、14 歳（中学３年生）でモスクワのロシア国立ボリショイバレエ学校に留学して、卒業後はロシアでバレリーナとして舞台に立ち、2010 年にペルミ国際バレエ・コンクールで 1 位を獲得するなど活躍してきました。

パートナーであるカラリョフ・アレクサンドルさんは、同バレエ学校でさやかさんの１年先輩。卒業後はバレエダンサーとして働くかたわら、ボリショイバレエ学校の大学・大学院へと進み、ロシア連邦国家バレエマスターの資格を取得しました。指導した生徒を次々とバレエ・コンクールで上位入賞させ、多くの優秀なダンサーをロシアのバレエ団に送り出しています。

カラリョフ多久田バレエアカデミーでは、現在、小中学生などを対象に、元町教室で週３回（火金日）、三宮教室で週１回（水）のレッスンを行っています。目指すのは、世界基準の指導で「海外で活躍できるダンサー」を育てること。アレクサンドルさんの大学院修士号まで学んだ深い知識と豊富な指導経験、さやかさんのロシアでの生きた舞台経験とバレリーナとしての知識が、生徒一人ひとりの可能性を最大限に引き出す理想的な指導スタイルを作り出しています。

カラリョフ多久田バレエアカデミー↓↓
https://www.korolevtakudaimperialballetart.com/

前置きが長くなりましたが、以下、多久田さやかさんに、14 歳でモスクワへバレエ留学した時から卒業後、ロシアでバレリーナとして活躍し、2022 年に帰国するまでのお話をうかがいました。

写真；ロシアで大活躍した多久田さやかさん（上）、
カラリョフ・アレクサンドルさん（中）、二人のディプロム（卒業証書）

«インタビュー» 多久田さやかさん

14歳でバレエ留学、18年間ロシアのバレエ団で活躍

大事にしたい「美しいと感じる心」

―― さやかさんは、鳥取でお生まれになって、3 歳でバレエを始められた。大阪日ロ協会のバレエ講習会(ロシア短期研修)に参加されたのはいつ頃ですか？

多久田　中学２年生の３月です。その前にも小学校５年から毎年、大阪であった講習会に参加しました。大阪日ロ協会の招へいで、ワガノワ・バレエ学校の先生が来日して、大阪や広島など各地を回ってバレエ講習会が開かれていたのです。私はずっとロシアでバレエを勉強したいと思っていて、中学校２年生の春休みにロシア・バレエ短期研修に連れて行っていただきました。

―― サンクトペテルブルグのワガノワ・バレエ学校ですか？

多久田　その時は、モスクワのボリショイとワガノワの両方でした。大阪日ロ協会がサンクトペテルブルグの「日本の春」というイベントに交流団を送っていたので、その交流イベントにも参加しました。2001 年の３月です。

私が参加したのはモスクワ３日間・サンクトペテルブルグ 1 週間の短期研修で、大部分の参加者はそれで帰国したのですが、そのあとエカテリンブルグの交流イベントに参加する別のグループと合流して、エカテリンブルグで３日間だけでしたがホームステイを体験しました。

私と同い年の日本語を勉強している女の子の家で、本当に日本語はほんのちょっとだけで…、私ももちろんロシア語がしゃべれなかったので、お母さんとおばあちゃんとその子と、みんなで辞書を片手に、「今日のご飯はお肉にするか、お魚にするか」とか、冷蔵庫に入っている瓶詰の野菜を出して「どれ食べる？」とか、会話しました。言葉が通じなくても身振り手振りで伝えたり、お魚とお肉、別に全然違うものを食べてるわけでもないし、何とかなるもんだなということを子どもながらに感じて、とてもよかったです。

―― ロシアへのバレエ留学の夢が膨れあがったわけですね。

多久田　はい、もうロシアに行きたくて仕方がありません。でも、ワガノワ・バレエ学校はまだ規定年齢に達していなくて、先生は「是非、いらっしゃい」と言ってくださったのですが、ワガノワは寮ではなくて一人暮らしで自炊なので、当時は高校１年の９月からでないと受け入れないという決まりがあったのです。あと１年半待たないといけない。けど、すぐにでも行きたい。ということで、モスクワのボリショイバレエ学校に中学３年の９月から留学しました。

３月の短期研修から帰って９月に留学するまでの間、ロシア語を勉強するために鳥取と大阪を何回も往復しました。バレエ講習の一環として大阪日ロ協会が開いていたロシア語講座です。ロシア語テープを聴いて勉強したり、ロシア領事館にビザを取りに行ったりして、2001 年 9 月からボリショイバレエ学校に留学したのです。

―― 中学校 3 年生、まだ 14 歳ですか。すごいですね、その若さで飛び込んでいくというのは。

多久田　今はもう小学生から留学する人もいるので、珍しいことではないかもしれないですが、当時は高校生でも「高校を卒業してから」というような空気がありました。でも、せっかくいただいたチャンスなので、もう必死でした。

ただ、手続きは大変でした。ボリショイバレエ学校に、日本の中学校の「卒業見込証明書」を提出しないといけないのですが、私は鳥取の公立中学校だったので、校長先生が「中学校で卒業見込みなんて書類を書いたことがない」と頭を抱えていました。私は、運よくというか、小さい時からバレエをやって、小学校の時に教育長表彰をいただいたりして、学校も教育委員会もすごく応援してくださっていたので、前代未聞のことですけれども、書類を出していただいて留学の道が開けたのです。

―― すごいエネルギーですね。それだけ熱意をもっていたから、むこうでも頑張れたんですね。

多久田　今振り返ると、「バレエが大好き！」「バレリーナになりたい！」という気持ちしか本当になくて、その気持ちだけで突き進んだという感じです。それは、よい意味では「夢を持つ」ということだけど、別の見方をすれば「幼い心」というか、世間知らずだったのだろうと思います。ただ、すごく感謝しているのは、それを周りのたくさんの方々が大事にして応援してくださったことです。そのおかげで、今日の私があるのだと思います。

ボリショイに留学した時、私は 14 歳でした。最初は４年

生とか、よくても 5 年生に編入されるだろうと言われていたのですが、当時の校長マリーナ・レオノワ先生が気に入ってくださって、私はすぐに 6 年生のクラスに入れていただいたのです。それも私の人生の中ですごくラッキーなことで、同じクラスには世界的バレリーナになったナタリア・オシポワがいました。

―― 結局、何年間留学したのですか。卒業後はロシアのバレエ団に入られたんですよね？

多久田　3 年間です。6 年生、7 年生、8 年生と 3 年間のバレエ留学でした。夫のアレクサンドルは、私の 1 学年上にいました。

2004 年 6 月にボリショイバレエ学校を卒業して、ロシアのバレエ団に入り、一人暮らしを始めました。

当時はまだ「バレエはロシアのもの。誇り高き国の文化芸術であって、アジア系の人間が舞台に立つのは許せない」といった空気があって、バレエ団に入るのもとても難しかったです。技術の上手下手ではなくて、もう国籍や顔つきだけでハネられるということがありました。ビザの問題もあります。外国人を雇用するのはやはりお金がかかりますし、いろいろ大変だったのですが、アレクサンドルが所属する「バレエ・モスクワ」というバレエ団に入団することができました。

―― 2004 年に卒業して、「バレエ・モスクワ」に入団、バレリーナとして本場ロシアの舞台で活躍された。ペルミの国際バレエ・コンクールで優勝したのはいつのことですか？

多久田　2010 年にペルミ国際バレエ・コンクールで第一位をいただきました。国際コンクールで優勝することを目標にロシアに留学したので、受賞はとても嬉しかったです。

受賞すると、そこはやっぱりバレエの国ロシア、たくさんのバレエ団からオファーが来ました。その後、私が夢に描いていたバレリーナ人生が始まりました。

小さいころから大好きで、本当にロシアに行く目標だったファルフ・ルジマトフと共演しました。現ワガノワ・バレエ学校校長のニコライ・ティスカリーゼ、ボリショイ・バレエ団の岩田守弘先生、アンドレイ・バターロフといった名だたる方々と一緒に踊ることができました。モスクワ、ローマ、ロンドン、ソウルと世界中を飛び回りました。心の底から「私の夢はかなった！」と思った瞬間でした。それが私の人生の誇りです。

―― でも、それまでの努力、ロシアでのご苦労も大変なものだったのではないですか？

多久田　実は、バレエ学校を卒業した翌年（2005 年）にモスクワのコンクールを受けたのです。私はまだ 18 歳でしたがシニアの部でした。私はコンクールといえば一生懸命練習して必死で踊るというイメージでいたのですが、一緒に出ているのはみんなバレエ団で主役をとって、毎日全幕踊っているような人たちばかりです。コンクールで踊るのは、全幕バレエのグランパドゥドゥとか、ソロの部分とか、ほんのちょっとだけなので、練習もしていない。パドゥドゥを踊るなんて朝めし前という感じで、全然緊張してないのです。それを目の当たりにして、「全然レベルが違うな」と実感しました。

「私はまだまだこのレベルに達していない。バレエ団で主役を踊れるようにならないとコンクールに出るものではない」と、その時に強く思ったのです。だから「とにかくバレエ団で主役を踊れるようになろう」と、その時から次のコンクールまですごくバレエ団に専念しました。バレエ学校よりもはるかにたくさん踊っていて、本当にそのころの記憶があんまりなくて、リハーサルを含め朝の 10 時から夜の 9 時までずっと踊りっぱなしみたいな生活でした。

そういう生活のままペルミの国際コンクールの準備をしたので、バレエ団のレッスンが終って、夜 9 時からコンクールのレッスン。本当に夜寝る間もなく練習して、バレエ漬けで過ごしました。アレクサンドルがいたから、そこまでできたのです。当時はもちろん彼もバレエ団で働いていたのですが、家で食事を作ってくれたり、疲れて帰ってきたら励ましてくれたり…。「さやか、痩せすぎだよ、ご飯をしっかり食べなさい」って。彼がいなかったら、今の私はいないと思います。

コンクールの間も、洗濯や食事などの世話をしてくれたり、衣装を直してくれたり、私が踊ることに専念できるようにしてくれました。

―― アレクサンドルさんとの出会い、結婚について、もう少し教えてください。

多久田　彼と仲良くなったのはバレエ団に入ってからで、結婚したのは 27 歳。10 年つきあって結婚しました。バレエ団では彼も一緒に踊っていました。

私がコンクールの準備をしている時に、アレクサンドルはいつも音楽係をしてくれていました。ある時、先生が「私がいない時はあなたがリハーサルコーチをやってね」と言ったのです。「先生、僕は音楽係をやってただけで、コーチなんてできません」、「いや、あなたは私が指導しているときに注意事項を全部聞いてるから、リハーサルなんか全然難しくないわ」。それで実際にコーチをやってみたら、先生が「あなたには教師としての才能がある。すぐ大学に行きなさい」。ロシアでは、国家試験のディプロム（卒業証明）がないと教師として教えることができません。それで彼はボリショイバレエ学校の大学に入った。大学に行って指導者の立場になるとメキメキと才能を発揮するようになりました。

彼は大学卒業と同時に、クラスノヤルスクのバレエ学校に教師として招待されました。そのころには私たちは結婚していたので、二人でモスクワからクラスノヤルスクに移ったのです。私はクラスノヤルスクの劇場で舞台に立ち、彼はバレエ学校で教えて、仕事をしながらさらに大学院にも行きました。

―― ロシアで充実したバレエ生活を送っていて、日本に帰って来

られたいきさつは、どうしてですか？

多久田　新型コロナの最中、2021 年 3 月に娘のアンナを出産しました。生まれる 1 週間ほど前に、鳥取の先生から翌年 2 月末の公演のオファーをいただいて、1 年後に 3 人で一時帰国したのです。

帰国したのは 22 年 1 月 22 日です。まだコロナの規制が厳しくて、アレクサンドルの日本ビザ取得、出発前の PCR 検査、帰国直後の強制隔離と、本当に大変でした。ようやく鳥取へ帰って、残りの隔離期間を実家で過ごして、公演準備の練習を再開している間に、ウクライナ戦争が始まってしまいました。

―― 22 年 1 月 22 日に帰ってこられて、ウクライナ侵攻は 22 年 2 月 24 日ですもんね。

多久田　2 月 27 日が公演本番で、それが終って、3 月 8 日にロシアへ帰る予定だったのです。でも、そのころにはロシア行きの飛行機が飛ばなくなっていました。予約していた東京ーウラジオストクのアエロフロート便はフライトキャンセルで、3 月の終わりまで延期を繰り返している間に完全に欠航になってしまいました。厳しいロシア制裁が実施されたこともありました。娘はまだ 1 歳になったばかりで、ロシアでの生活に不安があり、それでそのまま日本に残ることになったわけです。

私もロシアで 20 年暮らし、家もあったし、車もあったし、バレエ団の仕事もあったし、娘もむこうで出産して、もう日本に帰ることはないと思っていたのですが、結局、日本で生活することになってしまいました。

―― 神戸でバレエ・スタジオを開設されたのは？

多久田　ずっと鳥取の実家にいたのですが、ご縁があって、昨年 11 月 1 日に神戸でバレエ・スタジオを開設することができました。

カラリョフ多久田バレエアカデミーでは、元町で週 3 回、三宮で週 1 回、全部で週 4 回のレッスンをやっています。アレクサンドルはロシアのバレエ学校で教えていましたので、日本にいながらロシアに留学するのと同じレッスンが受けられます。世界が認めるロシア・バレエ。本物の授業です。すごく素晴らしいロシア・メソッドですので、皆さんと楽しくバレエを学んでいけたらと思います。私がロシアで学んだことや経験したことを、アレクサンドルと一緒に皆さんに伝えて、たくさんのバレリーナを育てていきたいと思っています。

練習も大事ですけども、私が大事にしていることは、「美しいと感じる心」です。人間としてもそうですし、とくに舞台芸術であるバレエをやるのに、美しいものを美しいと感じる心は非常に大事です。きれいな心、美しいと感じる心を持たないで、踊るのは現実にはとても難しい。音楽を聴くのも、バレエを踊るのも、子供たちの教育にとても大事な役割を果たすと思っています。

（2025 年 8 月 1 日／聞き手；伏田昌義）

日ロ友好愛知の会　講演会（4 月 5 日）

「ロシア民謡」はなぜ、日本人の心に響くのか

安原　雅之（愛知県立芸術大学 副学長）

「ロシア民謡はなぜ日本人の心に響くのか」というお題を頂戴し、いろいろ考えてみました。この問いに、明確な一つの答があるわけではありません。というのも、ロシア民謡は非常に多岐にわたっており、さまざまな種類の楽曲があるので、全部ひっくるめて一つの答えがあるわけではないのです。でも、何か共通するものはありそうだな、と考えながら準備してきました。

ロシア音楽・ソヴィエト音楽の話をするときに、最近特に意識することは自分の年齢です。戦争やソ連崩壊など、歴史的な大事件は、実際どのように経験しているか、あるいは経験していないか、人によって経験値がかなり異なります。私が世代ギャップを感じるのは大学でソ連の話をする時です。ショスタコーヴィチ、プロコフィエフの曲を学生たちはよく知っているのですが、ソ連の話になると「歴史で習いました」とか「昔はそういう国だったらしいですね」といった反応が返ってきます。私は 1961 年生まれです。物心ついた時はソ連という国がありました。私が初めての海外旅行でソ連に行ったのは、ゴルバチョフが登場する前の 1983 年でした。シベリア鉄道に乗ってロシアを横断しました。その後、モスクワに 2 回留学しました。1 回目は 1991 年で、アメリカからの留学でした。モスクワ滞在中にソ連が崩壊して（91 年 12 月）、その半年後にアメリカに戻りました。34 年前のソ連崩壊は、私にとっては鮮明な記憶ですが、その話を学生にすると「先生、それ私が生まれる前です」と言われます。経験値は人によって、年齢によって大きく異なるわけです。

前置きが長くなってしまいました。本題に入りたいと思います。

民謡とは？

まず、民謡とは何でしょうか？

辞書「大辞林」によると、「各地の庶民の日常生活の中から自然に生まれて長い間伝承され、その地方の人々の生活感情を表している素朴な歌謡。仕事唄、祝い唄、酒盛り唄、盆踊り唄など」と説明されています。

確かにその通りだと思うのですが、さて、最近耳に入ってくる民謡がどういうものでしょうか？ 日常生活の中で普通に歌われている仕事唄とか祝い唄というものを、今私たちが

聞くことがあるかというと、多分ありません。これは日本でもロシア・ソ連でも当てはまることでしょう。民謡は自然に生まれて伝承されたものではありますが、時代とともに、また歌い手によって、少しずつ形を変えて別なものになっていくのは避けられないと思います。

「採譜」で記録された民謡とその変容

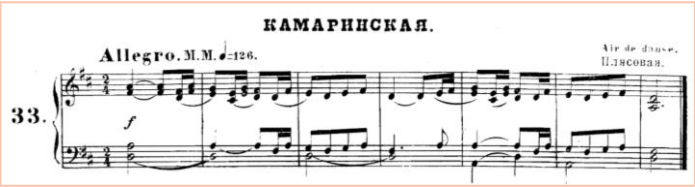
古くから人々に伝承されてきた民謡は、「採譜」によって記録されます。採譜というのは、楽譜に書き留める作業のことです。昆虫採集だったら虫かごを持って網で虫を取りますが、音楽の場合は実際に歌われたものを五線譜に書き留めて記録します。採譜をして楽譜になると、その歌は、自立した音楽作品になると言えるでしょう。

ロシアの民謡集から

ロシアでは、伝承される民謡を採譜して楽譜にまとめる作業が、18 世紀末ごろから一般的に行われるようになり、19 世紀に入るとたくさんの民謡集（譜例集）が作られました。本日、150 曲のロシア民謡が収録された、ビルヴォアという人の譜例集を持参しました。その中から、実際にいくつかの民謡の旋律を聞いていただこうと思います。

「カマリンスカヤ」は、比較的知られている民謡の旋律です。七小節しかありませんが、旋律がピアノ用にまとめられて楽譜になっています。～（曲）

あっという間に終わりました (笑)。カマリンスカヤの旋律は、これは最初からこの楽譜があったわけではなく、誰かがが歌っているのを採譜してピアノにアレンジしたらこうなったというものです。



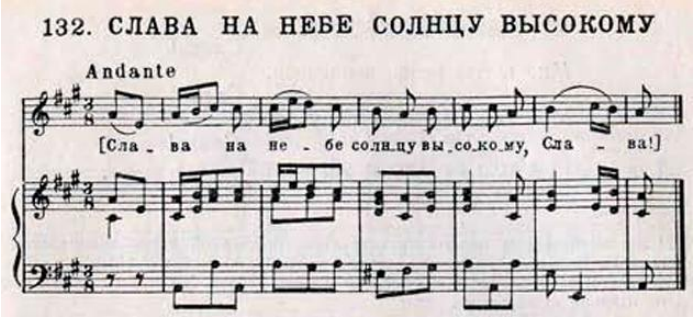
次は、チャイコフスキーのピアノ曲で、「子供のための曲集」の中の一つを聞いていただきます。これもカマリンスカヤです。～（曲）

ビルヴォアの楽譜では七小節だけでしたが、一旦採譜されると新たなフェーズに入って、展開・発展の可能性が生まれます。

19 世紀にはロシアに限らずいろんな国で民謡の採譜が同時多発的に行われましたが、ロシアではそれらが「ロシア民謡」として伝承されてきました。各国の音楽的な要素がそれぞれの音楽に読み込まれていきます。そのようにして、国民主義というものが台頭してきました。ロシアではそれが今日「ロシア民謡」と言われるものになっていったわけです。

民謡の自立、展開・発展

次に紹介するのは、リヴォフとブラーチという人が出版したロシア民謡集です。ここには 200 曲以上入っているのですが、その中で一曲だけ、「スラヴァ」という曲を聞いていただきます。音源がないので、メロディーだけを鍵盤ハーモニカで弾いてみます。～（曲）



どこかで聞いたことがあるような曲だと思いませんか？実際にどこかで聞いている可能性は充分にあります。一旦楽譜になるとそれが自立して、別な国や地域へ行く可能性も当然あるわけですが、あのベートーヴェンが、この曲の入った譜例集を持っていました。

ベートーヴェンのパトロンの一人で、ラズモフスキーというウィーン駐在ロシア大使がいます。彼からの委嘱でベートーヴェンは弦楽四重奏曲を書いているのですけれども、作品 11 の第２楽章に、ロシア大使への敬意を表してこのロシア民謡の旋律を入れ込んでいます。～（曲）

ベートーヴェン以外でも「スラヴァ」の旋律は使われており、大きな作品としてはムソルグスキーのオペラ《ボリス・ゴドゥノフ》の中の戴冠式のくだりでこの旋律が出てきます。～（曲）

ラフマニノフのピアノの連弾曲にも「スラヴァ」の旋律がそのままストレートに出てきます。～（曲）。堂々とした感じの旋律が、ラフマニノフらしい壮大なピアノの音でまとめられた曲になっています。

このように民謡集に組み込まれている旋律がいろんな作品に提供されているのを知ると、ロシア音楽を聴く楽しみが増えます。

第二次大戦後の日本における「ロシア民謡」

後半は、日本で一般に「ロシア民謡」として親しまれてい

る曲の話です。ここで「ロシア民謡」とカッコで括ったのには、それなりの意味があります。

第二次世界大戦後の日本で、「ロシア民謡」というカテゴリーの曲がたくさん紹介され、歌われるようになりました。どうしてそうなったのでしょうか？ まず一つは、第二世界大戦後シベリア抑留から帰ってきた人たちが「ロシア民謡」としていろんな曲を紹介しました。それと連動して起こった「うたごえ運動」の中で、「ロシア民謡」は非常に人気があって盛んに歌われました。二つ目に、これも連動していたと思いますが、ダークダックス、デュークエイセス、ボニージャックスといった人気男性ボーカル・グループが、「ロシア民謡」をレパートリーにしていたということがあります。

何人かキーパーソンになる人がいるのですが、その中で最も重要と思われる一人は、井上頼豊さんです。井上頼豊さんは戦前からオーケストラのメンバーとして活躍したチェリストで、プロコフィエフやショスタコーヴィチの伝記を書いた人でもあります。戦後、ソ連に数年間抑留され、1948 年に帰国してからも演奏活動を続けました。ソ連での経験は、音楽家としてとても重要な時期だったこともあって、影響が大きかったようです。ロシア民謡集を何冊も出版し、その中に「ロシア民謡」として歌われるようになった曲がたくさん入っています。

作詞・作曲された「ロシア民謡」も

ただし、この時代に「ロシア民謡」として紹介されたものの多くは、最初に確認した定義のような「日常生活の中で自然発生的に生まれた歌」ではなくて、作詞者がいて、作曲者もいるもので、歌がロシア風だということで「ロシア民謡」のカテゴリーに入れられて広まったものです。曲によっては「民謡」と言っていいのかどうかというのもあるし、最初から完全に作品として作られたものもあります。今日、ロシア民謡というときに私たちが思い浮かべるのは、ほとんどが戦後に紹介されたこの「ロシア民謡」です。

いろいろ調べてみて、ちょっとびっくりしたのは、NHK の紅白歌合戦で「ロシア民謡」が 5 曲も歌われていたということです。

1958 年第 9 回　ダークダックス「ともしび」
1960 年第 11 回　ダークダックス「すずらん」
　　ボニージャックス「一週間」
1963 年第 13 回　ダークダックス「カリンカ」
1967 年第 18 回　アイ・ジョージ「カチューシャ」

私は、ダークダックスやボニージャックスは、NHK の「みんなの歌」にも出ていたので名前は知っていたし、「1 週間」はこの人たちの歌で聞いた記憶もあるのですが、紅白歌合戦は知りませんでした。ダークダックスは「ともしび」でデビューして、これが一躍ヒットして有名になったようです。～（曲）

「ともしび」の作詞者はイサコフスキーですが、作曲者はわかっていません。「一週間」は、19 世紀に成立した歌だと考えられますが、作詞者、作曲者は不明です。「カチューシャ」は、作詞＝イサコフスキー、作曲＝ブランテルです。「カリンカ」は、作詞・作曲＝ラリオーノフ。「すずらん」は、1959 年にソ連で作られた歌です（作詞＝ファジェーエヴァ、作曲＝フェルツマン）。

19 世紀から今日までロシアで書かれた歌の中には、「民謡」というよりは「チャストゥーシュカ」（速歌／はやうた）というジャンルもあります。19 世紀末から都市部で大流行した遊び歌のようなもので、その名のとおり、速いテンポでアコーディオンやバラライカの伴奏に乗せて歌われ、軽快な踊りを伴うことが多い即興の歌曲です。こういったものも、異国に伝わると「民謡」と認識され、紹介されたということがあります。

「ロシア民謡はなぜ日本人の心に響くのか」

こういった「ロシア民謡」と呼ばれるものの音楽的な特徴があるとしたら、全部当てはまるわけではありませんが、ちょっと暗い「短調の曲」が多くて、「リズムは軽快」というところでしょうか。短調から長調に突然変わってまた突然短調にもどる「突然の変化」も「ロシア民謡」の特徴です。

何が日本人の心に訴えるのか。「これです！」とはっきり言えないけれども、短調のしっとりした感じで、だけどもリズムは軽快なので、独特な疾走感があるようなところに、多くの日本人が反応しているような気がします。

最後にもう一曲、共有します。「赤いサラファン」（作曲A・ワルラーモフ、編曲ヴィソツキー）のギター・バージョンで演奏されたものです。～（曲）

「赤いサラファン」は紅白では歌われてないですが、「みんなの歌」には取り上げられており、研ナオコさんがいい感じで歌っていました。

＊　　＊　　＊

まとめておくと、井上頼豊さんのような人たちが戦後、ソ連から日本に帰ってきたときに、「ロシア民謡」をたくさん紹介しています。それが「うたごえ運動」などを通じて日本社会に浸透して、実際に歌われるようになっていった。さらに、ボニージャックスとかダークダックスといった人気グループがレコードに吹き込んでヒットして、紅白歌合戦でも歌われた。1950 年代から 1970 年代にかけての日本におけるロシア民謡というのは、「うたごえ運動」をはじめ、日ソの文化交流や、いろんな社会運動とも連動して、日本社会に受け入れられていったのだと思います。ロシア民謡を通して、当時の社会の大きな流れが垣間見られるような気がします。（了）

※本稿は、25 年 4 月 5 日の安原雅之先生の講演内容を、事務局で要約して文章化したものです。

〔へだたれば、つなぐ〕（中編）

「へだ号Tシャツ」を知る人は本当に戸田にいるのか？

岡本 健裕（JIC 大阪）

戸田の砂嘴

＜前回までのあらすじ＞

"マニアフェスタ"というマニアックなフェスタで出会った「ヘダ号Tシャツ」に一目惚れした筆者（岡本）は、必ずこれを着て戸田（へだ）へ行くことを誓った。しかし直後、世界は新型コロナの混乱に襲われ、約束は果たされないままになってしまう。5 年近い月日が過ぎた 2024 年 11 月、ようやく岡本はヘダ号Tシャツを着て戸田に着いたのだった。ところが、出会う人に片っ端から見せてもヘダ号Tシャツを知っている人がいない。ラーメン店「いなだ苑」の店主とおかみさんはそろって首をかしげ、重要文化財「松城家住宅」を案内してくれた山口展徳さんも知らないという。もしかして、戸田では誰もヘダ号Tシャツを知らないのか…？

＜本編＞

さて、私はこれから、山口さんの車に乗せてもらって、戸田造船郷土資料博物館へ行くところです。ふだん山口さんが本業の大工の仕事用に一人で使っていると思しき軽トラックの助手席に、しばし場所をお借りして、松城家住宅を出発です。

山口さんはまず、戸田の地形を一望する高台の「出逢い岬」へと車を走らせてくれました。戸田の街は伊豆半島の西海岸に開いた小さな湾に面しています。その湾口には見事な鉤状の砂嘴がすっと南から伸びていて、さながらアルファベットの G を反転させたような形状が高台から仔細に観察できるのですが…ああ、実際に見るとこれはたまりません。地図で見てよし、実物はなおよし、いつまでも眺めていたい、うっとりするほど端正な地形です。それだけでも大興奮なのに、今から向かう資料館はなんと、この美しい砂嘴の先端にあるのです。ちょっとサービスしすぎではないかしら。

高台を下りると山口さんは、湾の南岸の牛ヶ洞（うしがほら）の空き地で車を止めました。2 度目の寄り道です。今は何もないように見えるここが「洋式帆船建造地」、つまりヘダ号がつくられた場所なのです。170 年前、西洋式の造船技術を初めて覚えた日本人は、この近所で働く船大工たちでした。そして今、目の前で案内してくださっている山口さんは、当時の木挽の直接の子孫にあたります。山口さんが戸田で大工を営まれていることは既に書きましたね。私は今、歴史の連続性の妙と、直に触れ合っているのです。

いよいよ戸田造船郷土資料博物館へ向かいましょう。砂嘴の先端にぽつんと博物館を作るのは、かなり思い切った選択です。一般に砂嘴という地形は、交通が遠回りなうえ、水、電気、通信にも微妙に難があるからです。こういうちょっとコスト高めの場所に、あえて文化施設を置くことを戸田は決めたわけです。当時は沼津市ではなく一個の独立した自治体、戸田村（へだむら）でした。小さな村の英断だと思います。

資料館の収蔵品の最大の目玉は、江戸時代からずっと戸田で守られてきたプチャーチンゆかりの品々です。それらが「洋式帆船建造地及びプチャーチン宿所 附関係遺品一括」という名称で静岡県から文化財指定されたことを機に、恒久的に展示公開するために戸田村はこの博物館を作ったのです。

建設に際しては、住民からも、民間企業からも、さらに当時のソ連政府からも寄付が集まり、1969 年、博物館は見事に開館しました。砂嘴の先端という、最高のシンボル性を有する場所に、この"おたから"を末永く守り続けるにふさわしい施設として。

博物館の入口には巨大なディアナ号の錨がどんと置かれています。これは 100 年間駿河湾に沈んでいた 2 つの錨のうちの 1 つを 1954 年に引き揚げたもの。引き上げるまで、ディ

アナ号の錨は漁師の間で「唐人の根っこ」と噂される海底の障害物で、決まって網が食われてしまう難所だったといいます。ちなみにもう 1 つの錨は 1976 年に引き揚げられ、富士市の公園に置かれています。

(上)ディアナ号の模型、(下)大きいヘダ号の模型

1970 年には、まだ展示品の少なかった博物館を当時のソ連大使が心配し、ソ連海軍設計局製作のディアナ号の模型（1/48）を寄贈しました。この模型は大阪万博でソ連館に展示されていたものです。さらにそこへ大阪の個人の方が、自ら製作した同縮尺のヘダ号模型を寄贈し、両船の大きさの違いが簡単に比較できるようになりました。

そして 2012 年にはもう 1 つ、ひときわ大きなヘダ号の模型（1/10）が東海大学博物館から貸し出され、展示室に加わりました。これは実際の船の構造を船大工の杉村宗作氏が忠実に再現したもので、内部構造も観察することができる、大変手の込んだものです。

この博物館は、設立から多くの人々の愛に支えられ続けて今に至っているのです。こんなにドラマチックでおもしろいのに、この博物館を訪れる人は多くありません。というか私と山口さんだけでした。あまりにもさびしい。でもなんとなくわかってはいたのです。戸田へ来るときに修善寺から乗った路線バスは、はじめ超満員でしたが、途中の「もみじ林」や「虹の郷」といった観光地で乗客はごっそり降りてしまい、戸田まで乗り通した客は私を入れてたったの 2 人でした。戸田に着いてからも観光客らしい人を全然見かけません。実は「松城家住宅」だって、私しか見学者がいなかったのです。大勢の観光客でにぎわう修善寺周辺と、時が止まったように閑散とした戸田、そのギャップは大きい。

でも、私がこうして山口さんを独占して戸田をめぐることができているのは、観光客が少ないおかげだと言えます。それに、戸田は漁業の町で、必ずしも観光客に頼らなくても困らない、とも聞きます。これからも戸田は、西伊豆観光のとびきりの穴場であり続けるくらいがちょうどよいのかもしれません。

さて、ヘダ号 T シャツの出番です。博物館受付の女性職員に T シャツを見せてみました。するとなんと（やはり？）、この方も T シャツのことはご存知ではありませんでした。これはいけません。戸田最強のアーカイブたる造船郷土資料博物館ですら、ヘダ号 T シャツが認知されていないならば、一体誰が知っているというのでしょう。

これはいよいよ暗雲立ち込めたと思ったら、職員の方が思い出したように「"くるら"ならあるかも」とおっしゃいました。すると山口さんも「ああ、"くるら"ね」とうなずきます。

くるら？ また風向きが変わりました。確か道の駅の名前だったような…。それでは"くるら"へ行きましょう！

山口さんの車はまっすぐには向かいません。次は砂嘴の付け根にある「戸田塩の会」に寄り道です。ここは塩を製造している作業所で、高齢の女性たちが数名、巨大なかまどに薪をくべて海水をぐらぐらと煮立たせているところでした。なんとこのまま 13 時間も炊き続けるといいます。原料の海水は戸田の沖合 1km、水深 20m のところで採水し、船に積んだタンクで持ち帰ってくるそうです。

ここに来るまで全く知らなかったのですが、戸田では古くから製塩が営まれており、約 1500 年前に安康天皇に献上したとも言い伝えられるほど歴史があるのだそうです。この「戸田塩の会」は、その伝統製法を 1995 年に復活させて、「戸田塩（へだしお）」を販売しているのです。

塩田のように太陽エネルギーを利用する製塩法が考案される以前の伝統製法なので、海水をそのまま平釜に張って、水分がなくなるまでひたすら炊きます。この方法だと、大量の薪と労力を要するのに、少しの塩しか採れません。だから、この塩はものすごく貴重なのです。

私は迷わずその場で 1 つ購入しました。100g で 480 円。安い！作っている様子を目の前で見ているのでわかりますが、この塩はどう考えても製造にかかったコストより安いのです。どうやって持続しているのか心配になるくらいです（外野か

ら勝手なことを言ってすみません）。

後で「戸田塩の会」のウェブサイトを見ると、この訪問の 2 ヶ月くらい前から商品が不足していて、オンライン販売は休止していることがわかりました（2025 年 10 月現在も再開しておらず、電話問い合わせのみ対応）。どうやら、直接購入できた私はかなり運がよかったみたいです。

そうそう、大事なことを報告しなくてはいけません。残念ながらここにも、ヘダ号 T シャツを知っている方はいませんでした。

次の寄り道はお墓です。ここはもともと私一人でも行くつもりだったところです。「露国水兵の墓」といって、プチャーチン一行が戸田に滞在中、心ならずも亡くなってしまった 2 名のロシア人が祀られているのです。

露国水兵の墓（宝泉寺）

宝泉寺というお寺に入ってすぐ右に並んだ墓石は、四角いものと丸いものが一つずつ。どちらもウメノキゴケらしき地衣類が表面を覆い隠しつつあり、ガサガサにただれたようになって判別が難しくなっています。わずか数年前に撮られた写真では、墓石はすっきりした外観をしているので、この地衣類は最近生え始めて、猛烈な速度で成長しているようです。

墓石のすぐ隣には石板が左右に設置されていて、日本語とロシア語の説明文がそれぞれ刻まれています。それによると、丸い墓石は江戸時代からのもので、ヴァシーリー・バケーエフの墓。四角い墓石はアレクセイ・ポトーチキンの墓で、もともと牛ヶ洞（さっき立ち寄った帆船建造地のところです）にあったものが水害で流されたので、1969 年にこの場所に新しく建て直し、ヴァシーリー・バケーエフと合祀した、とのことです。

おもしろいのは、日本語とロシア語で説明文の内容が微妙に異なっていることです。

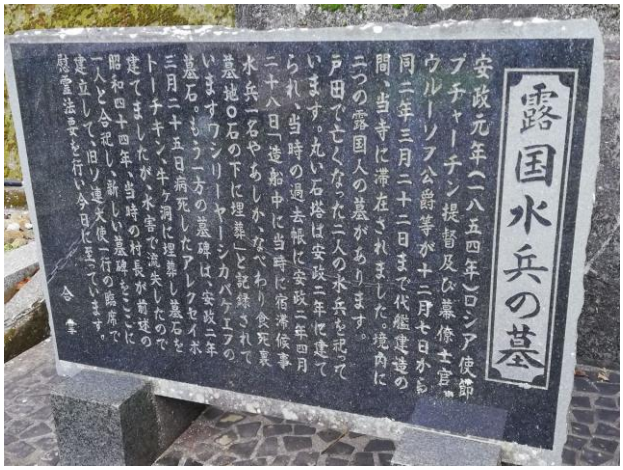
丸い墓石のヴァシーリー・バケーエフについて、日本語では彼の名を「ワシリーヤーシカバケエフ」と彫ってあり、ヤーシカという名称が入っています。宝泉寺の過去帳に彼の名が「やあしか」と記載されていた部分が文中に引用されているので、おそらくそれをそのままカタカナにして、名と姓の間に付記したのでしょう。

ロシア語の説明文では「やあしか」の部分は Васька（ヴァーシカ）となっています。ヴァーシカ！これはヴァシーリーの愛称です。ヴァシーリー・バケーエフはきっと、みんなからヴァーシカ、ヴァーシカと呼ばれていたに違いありません。

では日本人は彼をどう呼んでいたのでしょう。過去帳の文字通りに「やあしか」と発音していたかもしれませんが、もしかしたらちゃんと「ヴァーシカ」と発音していたけれど、文字で「ヴァ」を表記することができずに「や」で代用したのかもしれません。

さらにそのヴァーシカの死因についても、興味深い食い違いがあります。日本語の説明文では、過去帳を引用して「なべわり食死」と彫られています。なべわりって何？ 調べてみると、ナベワリという名前の毒草があるらしく、おそらくこれを食べて食中毒になったということのようです。

一方ロシア語の説明文では、отравления ягодами дикорастущего кустарника（野生の低木の果実による中



毒）と彫られています。どちらにせよ食中毒には違いないのですが、ナベワリは低木ではなく草本ですし、ロシア語で ягода と呼ぶようなベリー系の実もつきません。

両者のこの食い違いはどこから生じたのでしょうか。私は初め、どちらの説明文も宝泉寺の過去帳が情報源になっていて、ロシア語版を作るときに「なべわり食死」をうまく訳せ

なかったためなのではないかと考えました。しかし、後でざっと調べてみると、どうもロシア側は独自に、ヴァシーリー・バケーエフの死因を отравления ягодами дикорастущего кустарника と海軍が記録していて、現在もそれを公式のものとして扱っている節があります。

こうなってくると、ヴァシーリー・バケーエフが何を食べて命を落としたのかを、ロシア側の方が、正確に本人から聞き取っている可能性が出てきました。

複数の言語で記載された説明文はたいてい、片方がもう一方の対訳になっているものだと思っていましたが、この「露国水兵の墓」の説明文についてはどうも、日本語版とロシア語版はそれぞれ独自のソースを元に書き起こされていて、食い違いがあってもあえてそのままにしているのではないか、という気がします。日本には宝泉寺の過去帳がある。ロシアには海軍の記録がある。それぞれがそれをありのままに公開する。それが歴史の残し方というものだ、と。

一つ残念なのは、ここでは日本語とロシア語の両方を読めないと、その気概に触れることができないということです。いまやスマホをかざすだけで、かなりの外国語は翻訳できてしまうのですが、この説明文の食い違いの機微までを読み解くには、まだちょっと性能が及ばないようです。

さて、寄り道ばかりしていますが、ヘダ号 T シャツのことは少しだけ進展がありましたね。目指すは"くるら"です。「へだたれば、つなぐ」旅は、次回に続きます。

◇◆編集後記◆◇

▼本号は、たくさんの方から寄稿していただきました。「日本センターの閉鎖について」（朝妻幸雄氏）、「ロシア視点で見たハルビン旅行」（菅原信夫氏）、黒田龍之助さんの連載コラム「こんな時代にロシア語のすすめ」、今号から始まった徳山あすかさんの連載「ロシア生活」。そして、ペテルブルグ・ロシア語研修の参加者の皆さん、感想文をありがとうございます。▼神戸で「カラリョフ多久田バレエアカデミー」を開校した多久田さやかさんのインタビューと「ロシア民謡はなぜ日本人の心に響くのか」と題した安原雅之先生の講演録も、ロシア文化を理解する一つの手掛かりです。▼外務省がロシアに対する危険情報レベル 3 のただし書きを改訂し、やむを得ない事情がある場合にはロシア渡航を妨げないとしたことは、留学希望者、ビジネス関係者にとって朗報です。JIC はすでに昨年夏からロシア語短期研修旅行などに先行して取り組んでいますが、今後安全により一層配慮しつつ、ロシア留学の拡大に力を注ぐ決意です。▼ウクライナ戦争の停戦交渉の見通しはまだ立ちませんが、近い将来その日が来ることを信じて、日ロ交流の火をともし続けたいと思います。(F)

＊＊JICのロシア語留学・研修＊＊

35 年間の実績「だから、JIC のロシア語留学

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に旧ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 35 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 4,500 名以上にのぼります。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくのが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ごとや、緊急事態の際の連絡対応など、留学中の皆様をバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

ロシア語長期留学４月生・募集中

オンライン相談 受付中！

期間：2026年4月1日より10ヶ月

締切: 2026年１月１４日

※ウラジオストク極東連邦大学の締切は 12 月 13 日

モスクワ国立大学　1,590,000 円（授業料 10 ヶ月）
ｻﾝｸﾄ･ﾍﾟﾃﾙﾌﾞﾙｸﾞ国立大学 1,155,000 円(授業料 10 ヶ月)
ゲルツェン教育大学　998,000 円（授業料 10 ヶ月）
ｳﾗｼﾞｵｽﾄｸ極東連邦大学　420,000 円(授業料 10 ヶ月)
ベラルーシ国立外国語大学　422,000 円(授業料 10 ケ月)

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金および取得手数料などがかかります。

ロシア以外の国でのロシア語留学の手配も可能です！（中央アジア、バルト諸国など）

◆JIC ロシア留学デスク◆
電話またはメールでご連絡ください。
東京事務所　平日 9:30-16:30　03-3355-7294
※留学相談はオンラインで行っております（要 事前予約）